

# 「本当の豊かさとは何か」

## ～ラオスにおける貧困と教育に関するフィールド調査～

### ESD スタディーツアー報告書

ESD Study Visit Programme in Lao PDR  
— 2010 Report —

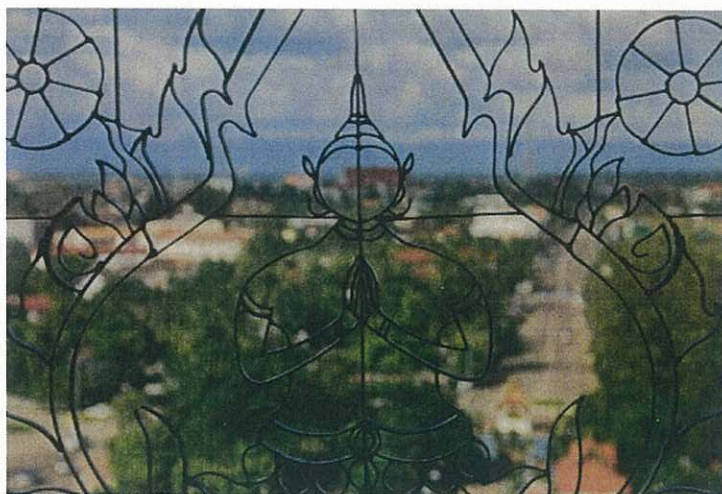


2010年9月11日～18日  
ラオス人民民主共和国（ビエンチャン・シェンクワン県）

2010年度スタディーツアー実行委員会  
聖心女子大学 永田佳之研究室  
*University of the Sacred Heart, Tokyo*

「本当の豊かさとは何か」  
～ラオスにおける貧困と教育に関するフィールド調査～  
**ESD スタディーツアー報告書**

ESD Study Visit Programme in Lao PDR  
-2010 Report-



2010 年 9 月 11 日～18 日  
ラオス人民民主共和国(ビエンチャン・シェンクワン県)

2010 年度スタディーツアー実行委員会  
聖心女子大学 永田佳之研究室  
*University of the Sacred Heart, Tokyo*

## はじめに

アジアのノーベル平和賞と言われるラモン・マグサイサイ賞受賞者のソンバット・ソンポン氏に初めてお目にかかったのは、ユネスコが主導する「持続可能な開発のための教育（持続発展教育：ESD）の10年」の開始まもない2006年2月であった。当時、「ACCU-UNESCO アジア太平洋地域 ESD 推進セミナー」が東京で開催され、ソンポン氏は、元東京大学総長であり、文部大臣も務めた有馬朗人氏と並んで基調講演者として招聘されていた。各国のユネスコ国内委員会の代表を前に、両氏の講演はともに実に魅力的であったが、科学的なデータをもとにした有馬氏のサステナビリティ論と宗教にも言及したソンポン氏の教育論は対照的であった。「教育の心髄（ハート）は、心（ハート）の教育である」というメッセージに代表されるように、持続可能な社会形成にとって最も大切なのは知識のみならず心も身体も重視した教育であるというホリスティックな教育観に基づいたメッセージは、文字どおり、筆者を含めた多くの聴衆のハートを掴んでいたと言ってよい。

この時、不遜にもソンポン氏に歩み寄り、名刺交換したのが契機となり、2年後にユネスコ・アジア文化センター（ACCU）にご支援いただき、聖心女子大学の海外スタディツアー（特別研修）で氏の運営するラオスの PADETC（参加型開発研修センター）を学生と共に訪問することが適った。さらにその2年後、聖心女子大学大学院の外国人講師招聘プログラムで氏はご夫人と共に来日し、大学での講演の後、那須のアジア学院を学生たちと訪問したりした。

やや慌ただしい一週間のプログラムを終えて帰国の途についた後、間もなくソンポン氏が送ってきたのは、ラオスにおける「教育の質」向上のための教育開発協働プロジェクトの提案書であった。将来的には4万3千人の生徒が在籍する850のモデル校を対象に教育支援を行うという壮大なプロジェクト案を受け取った我々はたじろぐばかりであったが、長年、アジアの貧困問題解決に向けた努力を惜しまない氏の姿勢と PADETC の実績に惹かれ、氏の提案するプロジェクト候補地と一緒に廻ってくれないかという依頼状を送ることにした。このリクエストは直ぐに快諾され、敬愛するソンバット氏と共に国際協力のフィールドを廻る旅が実現する運びとなった。このような好機は二度と来ないかもしれないと思い、意識の高い学生であれば参加できるスタディツアーとして位置づけることにした。

選ばれたフィールドはラオスの首都ビエンチャンの北部にあるシェンクワン県である。ラオス内戦時には、アメリカの執拗な爆撃にあい、先住民はじめ多くの民が命を失った。現在でも、毎月のように不発弾による事故が起きている地域であり、街中では焼

き焦がれたクラスター爆弾が観光客用に5ドルで売られ、爆弾に使用されたアルミ合金から作られたスプーンやフォークが食堂や学校で使われている。地雷を踏んで障がいを負った村人は少なくなく、日本も含めた地雷除去 NGO が街中にオフィスを構え、忙しく活動している。いまだに戦争の傷跡が生々しく残る地域である。

ESD をテーマにした海外でのスタディツアーは第4回目となるが、今回のスタディツアーは田舎道を車で移動するために4人という学生枠しか設けられず、否応なしにも少数精鋭チームとなった。シェンクワン県では、社会教育施設を1ヶ所、公立小学校を4校まわり、調査の最終日には、県の教育庁で教育長官に学生たちが英語で調査報告を行った。さらにビエンチャンでは、教育省や日本大使館、ユネスコ国内委員会、PADETCを訪れ、シェンクワン県で学んだことや学生なりに提案できることを発表した。こうした強行軍の合間を縫ってシェンクワン県では世界遺産の候補地とされているブレン・オブ・ジャーズ（巨大な壺群の散在するミステリアスな高原）を見学する機会にも恵まれた。

実にさまざまな出会いを通して学生たちは狭いキャンパスでは学び得ないことを学び、ラオスの人々と、そして仲間と〈生きられる時間〉を共有できた。道中の節々で、経済・社会の発展と持続可能性とのジレンマ、つまり、発展すればするほど、自然環境などが持続不可能な様相を呈するという現代社会の問題について考え続けた。答えは旅を終えても見つからなかったが、ソンポン氏から、問い続けることの大切さ、そして問いの中を生きることの大切さを教えられた旅でもあった。

スタディツアーの楽しみの一つはラップアップ（ふり返し）の時間である。毎晩、その日に起きたこと、感じたこと、気づいたことなどを皆とシェアする語り合いの時間を、どんなに疲れていても持つようにする。いまだきの学生でも、こうした時間はすこぶる評判がよいので、特に1週間の旅をふり返る最後のラップアップは時間をたっぷりかけて行うことにしている。時にはホテルの1室を借りて4時間くらい〈深まりの時間〉をもつこともある。

ところが今回は空港に向かう日の午後にも予定外の教育省訪問や PADETC 職員とのお別れ会が入ってしまい、まったく時間的ゆとりがなく、空港ロビーの片隅にある食堂で1時間弱、なんとか時間を確保した。空港ロビーに特有の喧噪の中、4人の学生は集中して各々の「想い」を語った。一つひとつの言葉はここに採録されないのが残念なほどに瑞々しく、心に残るものであった。最後に、いかに学生達が多くのことを学び、吸収したかを称賛するかのよう、ソンポン氏が静かに語りかけ、学生たちに知恵の言葉を授けてくれた。人生は学びであり、学びは人生であるということ、消極的な学習（沈黙に傾聴したり、物事をじっくりと観察したりすること）にこそ真価があり、本物の価



値に気づくことが重要であること、上辺の知識ではなく真の知性と知恵を習得し、感情に流されないように心を鍛えることが肝要であること、などなど・・・。

グローバル化が雪崩のごとく押し寄せている現在のラオスの社会情勢を憂えるソンポン氏は、「真の価値と偽の価値」について子どもが学び、両者を識別する能力を習得することの大切さを、村々の学校で、そして教育省でも説いていた。そんな氏の存在は多かれ少なかれ、1週間同じ釜の飯を食した学生たちに影響を与えていたようだ。

ある学生はラップアップの時間に次のように語っていた。「自分が今まで大事にしてきた価値観や優先順位って何だったのか・・・本当の価値であると思っていたことは本当にそうなのか。欲しいものや楽しいことだけに重きを置いてばかりいると、本当に大事なものを見失う人生になってしまう、と感じました。ラオスの人の笑顔や絆は明らかに「真の価値」だったと思い知らされることがたくさんあったのです。答えはまだ見つかからないけれど、本当の価値と誤りの価値を見分ける力を身につけることが大切だとソンバットさんが教えてくれたのです。」

もちろん学生たちは、ラオスの自然や文化、都心の光景、役人やNGO 職員の働きぶり、庶民の生活など、多くのことを学んだ。しかし、彼女たちの最も奥深いところで学び得たものは、東京の生活では出会わないような「真の価値」であったように思われる。

ESD を推進する際に各国の政府によって参照される国際実施計画に「持続可能な未来に向けて価値観と行動とライフスタイルを変容させていくこと」とであると明記されている。たしかに、知識レベルでは自然や人との関係性を大切にすることは分かるようになったとしても、なかなか価値観までは変容されないことは、力不足の我が授業実践を通して普段から痛感している。しかし、スタディツアーはもののみごとに可能性を拓く時空を提供してくれる。学生たちの「変容」の一端にこの報告書を通して触れていただければ幸いである。

第4回スタディツアー世話人

永田佳之

## 目次

1. はじめに	i
2. 参加者プロフィール	1
3. スタディーツアー公募ポスター	3
4. ラオス国情報	5
5. PADETC について	7
6. 事前勉強会資料	9
7. 調査の概要	29
(1) スタディーツアー日程表	31
(2) ラオス国シェンクワン県地図	33
(3) 訪問校の特徴	37
(4) シェンクワン県教育事務所での発表(要旨)	38
8. 感想文	41
9. 写真集	55
10. ソンボン氏講演資料	69

## ENGLISH REPORT

1. Presentation at the Educational Authority in Xiangkhouang	91
2. Reflections	95

## 参加者プロフィール



- 名前 : 永田佳之 (ながた よしゆき)
- 聖心女子大学の教員歴 : 4 年半
- 長所／短所 : 世話好き／世話焼き
- 趣味／特技 : なんばあるき／なんばはしり
- 目的 : 国際教育協力士・国際理解教育者の卵育成の為
- ラオスのイメージ (行く前) : まったり  
(行った後) : セカセカぞめ
- ラオスで好きな場所 : メコン川沿いのフォンダンショコラのおいしいレストラン
- Email : yoshy@pobox.com

- 名前 : 斉藤 美貴 (さいとう みき)
- 学年／所属専攻 : 大学院 1 年／人間科学専攻「教育研究」領域
- 長所／短所 : 前向き、よく食べ、よく寝る／頑固
- 趣味／特技 : 映画鑑賞、読書、自然とふれあう／料理
- 目的 : 修論の調査、ラオスの風にあたりたかった為
- ラオスのイメージ (行く前) : 2 年前よりも危険な街になって欲しくない  
(行った後) : 2 年前よりも良くも悪くも活気があった
- ラオスで好きな場所 : 地域の人が行くローカルなお寺
- Email : mikkisaito@hotmail.co.jp

- 名前 : 下里 祐美子 (しもさと ゆみこ)
- 学年／所属専攻 : 4年／国際交流専攻・ボランティア研究副専攻
- 長所／短所 : 熱い／ネガティブ
- 趣味／特技 : ダジャレ／犬の種類が結構言える
- 目的 : 教育が持つ希望について考えるため、ESDが先進諸国だけのものではないと発見をくれたソンバット氏と同じ時間を共有したかった為
- ラオスのイメージ (行く前) : 雨、果物、自然  
(行った後) : 犬、おかゆ、人と人、人と自然の距離が近い
- ラオスで好きな場所 : ソンバット邸のベランダ
- Email : song1016mc@yahoo.co.jp

- 名前 : 唐渡 理美子 (とわたり りみこ)
- 学年／所属専攻 : 3年／英語英文科専攻・国際交流副専攻
- 長所／短所 : 適応能力がある／短気
- 趣味／特技 : 日本舞踊、映画鑑賞
- 目的 : 将来の夢への第一歩の為
- ラオスのイメージ (行く前) : 未知数  
(行った後) : 多くの先進国が失ってしまった大切な価値あるものが存在する国
- ラオスで好きな場所 : メコン川
- Email : never\_everxxx@yahoo.co.jp

- 名前 : 井上 苗奈 (いのうえ なな)
- 学年／所属専攻 : 3年／初等教育学専攻
- 長所／短所 : 何事にも一生懸命取り組む／欲張り
- 趣味／特技 : ピアノ／テニス
- 目的 : ラオスと日本の教育を比較したい為
- ラオスのイメージ (行く前) : 田舎、のんびり  
(行った後) : ボーペンニャン (ラオス語でどうにかなる！)
- ラオスで好きな場所 : モン族の家
- Email : nana46492000@yahoo.co.jp



## ＜スタディツアー公募ポスター＞

### 第4回 ESD スタディツアー「本当の豊かさとは何か」 ～ラオスにおける貧困と教育に関するフィールド調査～

#### 【参加者募集】

目的：ラオスの NGO「参加型開発訓練センター」(PADETC: Participatory Development Training Center) と協同して同国の貧困村でのフィールド調査を実施し、また現地の国連機関事務所や NGO を訪問することにより、教育分野の国際協力専門家になるための技能や実践感覚の習得を目指します。

対象者：将来、教育分野等における国際協力活動に従事することに関心があり、日常会話程度の英語力を習得している聖心女子大学の学部生及び大学院生の参加を原則とします。また、参加決定者は下記の日時等の事前準備を兼ねた学習会に参加することが求められます。

- 2010 年 6 月 25 日 (金) 午後 1 時～1 時半 (3 号館 4 階、永田研究室)
- 2010 年 7 月 7 日 (水) 午後 12 時半～13 時半 (3 号館 4 階、永田研究室)
- 2010 年 7 月 12 日 (月) 同上

訪問国：ラオス人民民主共和国

(ビエンチャン、シェンクワン県 ⇨ 右地図を参照)

募集人数：若干名 (4 名前後を予定)

訪問期間 (予定)：2010 年 9 月 11 日 (土) ～17 日 (金)

必要経費：14 万円程度 (往復航空旅費および現地滞在費、ビザ取得代等を含めた予定額ですが、前後する場合があります。)

選考方法：書類選考 (参加志望の動機についてのエッセイ) と英語による面接  
6 月 22 日～24 日のいずれかの昼休みに英語による面接に参加することが求められます。



提出書類：「私はなぜ第4回 ESD スタディツアーに参加したいのか」について  
記した作文 A4 一枚、800 字程度)

提出の際、別紙に氏名、学籍番号、学年、学科・専攻、連絡先  
(パソコンメールアドレス、携帯アドレス、携帯電話番号)を明記  
すること

申請期間：6月7日(月)から6月21日(月)17時まで

提出先：教育学科研究室(2号館2階)

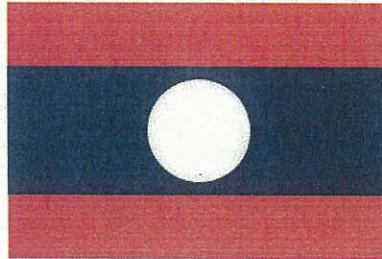
結果発表日：6月25日(金)12時半に、2号館2階の教育学科掲示板にて学生番号で告知。

- ★ ご質問等は、永田(yoshy@pobox.com)までメールをお願いします。
- ★ 標題の「ESD」とは、持続可能な未来に向けた教育(持続発展教育)を指し、国連のユネスコが主導機関となって世界各地で展開されている教育運動です。詳細は下記 URL を参照。

<http://www.esd-j.org/j/esd/esd.php>



## ラオス国情報



赤は自由と独立のために流された血、白い丸は平和と輝かしい未来の展望、青は国家の繁栄とメコン河を表している

正式国名	: ラオス人民民主共和国 (Lao People's Democratic Republic)
国歌	: Pheng Xat Lao (ペーンサツラオ)
首都	: ビエンチャン
人口	: 640 万人 (2009 年 IMF (推定値))
面積	: 24 万平方キロメートル
民族構成	: 低地ラオ族 (60%) 他、計 49 民族
宗教	: 仏教 (約 90%)
言語	: ラオス語
通貨	: キップ (kip) 使用されているのは紙幣のみ
時差	: 日本と 2 時間の時差 (日本の方が早い)
歴史	: 1353 年、ランサーン王国として統一。1899 年フランスのインドシナ連邦に編入される。1949 年仏連合の枠内での独立。1953 年 10 月 22 日仏・ラオス条約により完全独立。その後内戦が繰返されたが 1973 年 2 月「ラオスにおける平和の回復及び民族和解に関する協定」が成立。インドシナ情勢急変に伴って、1975 年 12 月、ラオス人民民主共和国成立。
政治体制	: 人民民主共和制
元首	: チュンマリー・サイニャソーン国家主席
議会	: 国民会議 (1) 議長名 トンシン・タンマヴォン (党政治局員) (2) 一院制 (115 名)
政府	: (1) 首相名 ブアソーン・ブッパーヴォン (党政治局員) (2) トントル・シースリット (党政治局員、副首相兼任)

# <ラオス地図>



## <ビエンチャン・シェンクワン 面積・人口>

州	面積 (km <sup>2</sup> )	総人口	男性	女性
ビエンチャン	3 920	754 384	377 424	376 960
シェンクワン	16 358	263 697	130 607	113 090

### ● ビエンチャン情報

メコン川沿いのラオス最大の都市であり首都。16世紀ごろに当時の王、セタティラートにより首都と定められた。現在も政治、経済の中心地であり国のメインゲートとなっている。フランス植民地時代の古い建物や並木道、多くの仏教寺院が混在し、アジアと西洋文化の融合がみられる。

### ● シェンクワン情報

シェンクワン県はラオス北部にあるビエンチャン県の隣の県で、東をベトナムと接している。県庁所在地ポンサワン→謎の石壺群、ジャール平原の拠点となる町。ジャールとは「壺」を意味する語だがこれにまつわるミステリーの謎は未解決。

1960年代半ばから始まったラオス内戦の地でもあり、ジャール平原内に残る無数のクレーターはアメリカ軍が投下した爆弾の跡。未だ撤去されていない不発弾が多くあり、その処理のために世界各国からの支援はあるが毎年犠牲者が出ているのが現状。

【参考 URL】 ラオス政府観光局 <http://www.jumping-lao.com/laos.html>  
 外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/data.html>  
 (2010/10/7)



## PADETC について

2010/07/23 4年 下里祐美子

Participatory Development Training Center : 参加型開発研修センター

センター長 : Sombath Somphone (ソンバット・ソンポン氏)

ーラオス人による、ラオス人の将来のための持続可能な方法による地域生活の向上を目指す団体。

メンバー自身がオルタナティブな開発モデルのデザインと実施に関わり、様々な開発活動を行う。



Mr.Sombath Somphone

1952 年ラオス生まれ。1971 年から 9 年間アメリカに滞在。ハワイ大学にて教育学学士号、作物学。土壌科学修士号取得。米を主体とした統合農法プロジェクトと、参加型開発プロジェクトのチーフ技術者として PADETC の活動に携わる。1996 年より現職。2002 年、持続可能な未来に向け、地域社会の指導者となりうる青少年への献身的な活動が評価され、ラモン・マグサイサイ賞（社会指導部門）受賞。

1890 年代 : ソンポン氏アメリカからラオスへ帰国。

当時のラオスは食糧供給不足が問題に。そこでコメを主体とした循環型農業の紹介から、園芸、水の衛生、養豚、養鶏 etc へと発展し、最終的な形として「農村開発計画」の誕生。

PRA (Participatory Rural Appraisal: 参加型農村評価) を用いた地域ニーズ調査、プログラム開発の実施。これらを通し、農業プログラムが農村開発プログラムへと進化。政府職員に対して、プログラム実行のための人材育成トレーニングを開始。

1996 年 : 政府職員に対して行っていた、マネージメント、計画、評価などのシステム開発。

プログラムが「農村開発プログラム」として国家レベルでの実施が決定。しかし、役所の配置替えの度に一から指導しなおさなければならず、効果的ではなかった。そのため、ソンバット氏はアプローチを変え、大学を卒業したばかりの若者に対し訓練を開始。

ところが、半年ほどしても彼らに十分な効果が見られない。ソンバット氏は、「大学卒業後の若者に訓練するのでは遅い」と感じ、そこには大学教育の質の問題があることに気付く。(若者の、観察力や分析力などの不十

分さから) もっと若い年代に対し、開発プログラムを実施することの必要性から、その対象を小中学生、大学レベルへと向ける。

このプログラムは「農村開発プログラム運営のための人材育成」が目的ではなく、大学卒業後に必要となる基本的スキル

【主なプログラム概要】

- ◎若者に対するリーダーシップ研修
- ◎農村開発
- ◎マクロな事業経営開発
- ◎参加型で、実際の生活に即したトレーニング
- ◎メディアを活用した教育
- ◎教員養成
- ◎僧侶による精神教育, etc

ラオストーリー ①

【That Luang タートルアン】



タートルアン(That Luang)はラオス仏教の最高の寺院で、ラオスの象徴とも言える。伝承では3世紀頃インドからの使いの一行がブッダの胸骨を納めるためにタートルアンを建立したと伝えられるが、定かではない。記録として残っているのは、当時の王セーターティラートがルアンパバーンからビエンチャンに遷都した16世紀半ば、1566年に建設を始めたということくらい。その後、1873年に中国の侵攻で破壊されたが、1930年代に入ってから本格的に修復され、現在の姿になった。

## 事前勉強会資料

## 事前勉強会日程

日にち	テーマ	担当
2010.7.7	顔合わせ（自己紹介）	永田佳之
2010.7.12	ラオスの基礎情報	唐渡理美子
2010.7.23	PADETC 及びソンポン氏について アニミズムについて	下里祐美子
2010.7.30	ラオスの教育	井上苗奈
	ラオスへの教育支援①	斉藤美貴
	交流会（広尾 JICA 地球ひろばで）	全員
2010.8.10	国際機関 日本アセアンセンター訪問	永田佳之 下里祐美子 唐渡理美子 井上苗奈
2010.8.31	NGO 訪問（ラオスのこども）	斉藤美貴・井上苗奈
2010.9.1	訪問の報告	全員
	ラオスにおける教育の変遷と経済改革	下里祐美子
	ラオスへの教育支援②	斉藤美貴
2010.9.8	国際識字デー （広尾 JICA 地球ひろば）	斉藤美貴
2010.9.10	総括	永田佳之



## 『アニミズム (animism)』

土着精霊信仰・精霊崇拜。力・呪力・霊魂など「霊的存在」への信仰のこと。

下里 祐美子

### 【2. アニミズム（精霊信仰）と世界宗教融合の具体的事例】

#### 事例1 フィリピン

フィリピンは16世紀から19世紀末まで300年にわたり、カトリック国スペインの東洋植民地であった。そうした歴史的背景により、ローマ＝カトリシズムの影響が隅々にまでいきわたり、アメリカ統治期を経て第二次世界大戦後に共和国として独立した後でもカトリシズムは国民の大多数の宗教として定着している。総人口の85%前後がカトリック信徒といわれる。

先スペイン期のフィリピン住民社会には精霊信仰を中核とする土着のパンテオンが存在していた (p.113 図8-1)

・土着祭司＝呪術宗教的職能者（シャーマン）

※16世紀後半にはじまったスペインによる植民地化、カトリック布教の進展、それによるカトリック社会の形成とともに、フィリピン人の間では精霊信仰に依拠する土着の宗教伝統は徐々にその全体性を喪失、それ自体で完結するシステムをもたなくなった。外来宗教であったカトリシズムの提供する枠組みが次第に大きな影響を持ち、底辺で行われている精霊信仰の世界を取り込みはじめた。

⇒こうした外来と土着という二つの文化、宗教のすり合わせの過程で生成したのが、土着の宗教伝統である精霊信仰の上に選択的に受容され変容をとげた、民衆カトリシズムである。

#### 事例2 タイ

人口の95%が仏教徒。全国寺院の9割以上が地方農村部に分布する。とくに、面積・人口ともに全国の三分の一以上を占める東北部はタイ全土の登録寺院の半数を擁する。

・精霊の存在 (クワン, ピー)

①宗教儀礼 タム・クワン：アニミズムの伝統に依拠して行なわれているものだが、タイ人にとっては仏教徒としての自己の立場とタム・クワン儀礼への参加とはなんら矛盾するものではないと考えられる。

②精霊観念 ピー：精霊を慰撫することにより、人間世界の安定が達成されると信じられている。花や木、あるいは人のなかにもピーは存在し、良いピーと悪いピーがいる。



庭先などにあるピーの住居

※このような儀礼の場面には、原則として上座仏教の僧侶は姿を見せない。つまり、仏教儀礼とは別のものとして認識されているが、実際の儀礼の過程においては仏教的なシンボルや詠唱文などが用いられることもある。タイ人仏教徒社会においては、仏教徒アニミズムという少なくとも2つのことなる宗教体系が並存している。

事例3 ジャワ

アメリカ人人類学者、ギアツによる分類が知られている（サントリ、プリアイ、アバンガン p. 121）

クリフォード・ギアツ



サンフランシスコ生まれ。第二次世界大戦で海軍従軍後、アンティオーク・カレッジで哲学の修士号を取得。ハーヴァード大学に進み、社会人類学を専攻し1956年に博士号を取得。その後、カリフォルニア大学バークレー校助教授（1958～60年）シカゴ大学教授、プリンストン高等研究所社会科学教授（1970～99年）などを経て、2000年よりプリンストン高等研究所名誉教授。また、1992年には福岡アジア文化賞を受賞。

### 【3. 世界宗教の伝播と定着】

	人口比	信仰方法	備考
仏教 (上座)	ビルマ:89%	・出家した僧侶によって組織される「サンガ」(教団)を中心として展開	・東南アジアにおける仏教の主流は上座仏教 ・スリランカで成立 ・出家＝成熟した人
	タイ :95%		
	ラオス :50%		
	カンボジア、ベトナム南部、		
	インドネシアの一部		
仏教 (大乘)	ベトナム人	・華人の場合、大乘仏教的な要素に加えて、道教や儒教の要素との混在、融合がある。	・華人系の宗教は「三教」「中国系宗教」とよばれ、庶民レベルでは「タンキー」
	東南アジア各地に居住する華人		
イスラム	インドネシア:88%	—	・東南アジアで最大の信者を持つ宗教 ・13世紀後半以降に登場(アラブ商人の交易ルートを通じて) ・15世紀の終わりにはフィリピンに伝播 ・実践の度合いに地域差がある
	マレーシア :44%		
	ブルネイ :55%		
	タイ南部パタニ、ミンダナオ、		
	スルー諸島など		
キリスト教	フィリピン:85%(カトリック)	—	・ヨーロッパ勢力による植民地化の影響 が大きい ・アメリカ植民地であったことによる、プロテスタンティズムの布教 ・ムスリム社会への浸透は困難
	フィリピン:93%(その他教派含)		
	ビルマ(ミャンマー):5%弱		
	マレーシア:5.4%		
ヒンドゥー教	バリ島中心に300万人	・土着信仰と融合したもの	

#### 参考文献

『イスラーム世界がよくわかる Q&A 100』 板垣雄三 株式会社亜紀書房  
『東南アジアの宗教と政治』 山本達郎 日本国際問題研究会 / 『東南アジア学5  
東南アジアの文化』 前田成文 弘文堂

## ラオスの教育

2010 年 7 月 30 日

井上 苗奈

### 1. ラオスにおける教育史

#### 社会主義政権成立までの教育

##### (1) フランス統治以前 — ワット（寺）における教育

- ・ 仏教徒の男子のみ

（女子は学校教育を受けることができず、妻になるための教育を受ける）

- ・ 僧侶が教師の役割（僧侶があらゆる決定権を持つ）

※教育の場となったワットでは、僧侶が教師の役割を果たし、仏教の教えや村の伝統価値（先輩や両親を敬うこと等）、礼儀作法、ラオス語の読み書き、算数、地理、話し方などを口頭によって伝授していた。当時のワットは宗教的な機関というよりもむしろ教育の場であり、フランスの教会学校にあたるような機関であった。

##### (2) フランス統治時代の教育 — 愚民政策

- ・ 経費をかけずにただ植民地として維持する

※フランスは、インドシナ半島進出のためには、5つの国境を持ったラオスが戦略的に必要な場であると考え、タイ（シャム）に軍事的圧力をかけ、1893年にラオスの保護権を獲得した。しかし、保護権を獲得した後は、内陸の小国であるラオスを重要な国でないと考え、経費をかけずにただ植民地として維持していく姿勢をとったのである。

- ・ 間接統治をとる（ベトナム人を使ってラオス人を管理させる）
- ・ ラオス人の知識階層を育成しない「愚民政策」  
→ 教育分野の整備や開発は遅れる一方である

##### (3) フランスから独立後の教育

- ・ 1954年フランスから独立
- ・ 当時のラオス政府指導者、国民を教育することに興味を持たず  
→ 教育制度を改めない

#### 社会主義政権成立後の教育

##### (1) 1975年、社会主義政権成立

→ 政府は教育システムを改革することを試みるが、教育分野に携っていた多数の職員が海外に出国していた為、教育計画を管理する人がいなく、改革はほとんど行われなかった。

(2) 1986 年以降、教育政策に変化

→新経済システムを導入する。

## 2. 現在の教育行政と学校制度

### (1) 教育行政

- ・教育省が中心

(教育制度の計画、教育政策に関する助言や勧告および国全体の教育活動を監視)

### (2) 学校制度

- ・5 段階のレベル (現在では 4 段階のレベル)

→就学前教育、初等教育、前期中等教育、後期中等教育、高等教育

- ・小学校 5 年、中学校 3 年、高校 3 年の 5・3・3 年制

- ・義務教育は小学校の 5 年間のみ

※初等教育は唯一の義務教育で 1990 年の「万人のための教育世界会議」に参加して以来、政府が最も力を入れている分野である。また、通常 6 歳で入学するが、ラオスには戸籍がないため、身体的に 6 歳並と基準に達せば、入学を許可する習慣があります。その判断基準が (片手を上にあげ、頭に沿って手を曲げて耳をつかむことができる)

また、就学前教育から高等教育にわたるまで、教授言語は多民族派の低地ラオ族が使用するラオス語およびラオス文字である。また、就学前教育を除き、全教育レベルにおいて、基本的に学費は公立学校のみ無料である。

～ラオスの教育段階と該当年齢～

教育段階	名称	該当年齢
就学前教育	保育園	0 歳～2 歳
	幼稚園	3 歳～5 歳
初等教育	小学校	6 歳～10 歳
中等教育	中学校	11 歳～13 歳
	高等学校	14 歳～16 歳
高等教育	大学、技術学校、教員養成学校	16 歳以上

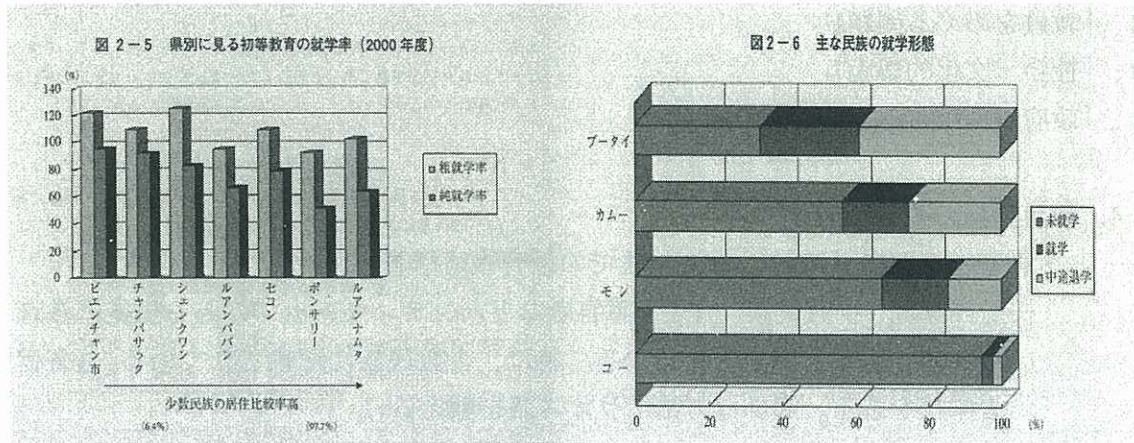
出典：乾美紀 (2004) 『ラオス少数民族の教育問題』 明石書店 p. 33 より発表者作成



### 3. 問題点

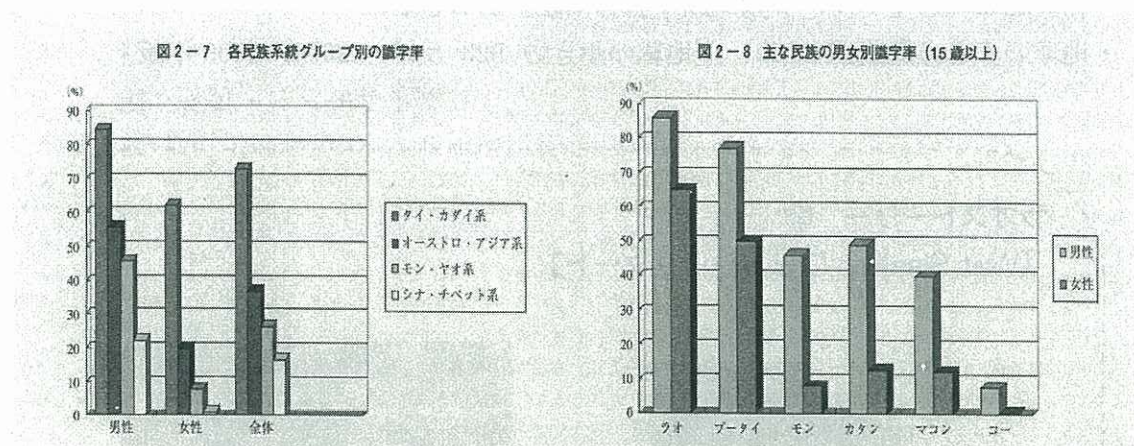
- ・ 広がる都市と地方の格差（就学率・進学率・識字率・中途退学率・留年率）

#### ●就学率



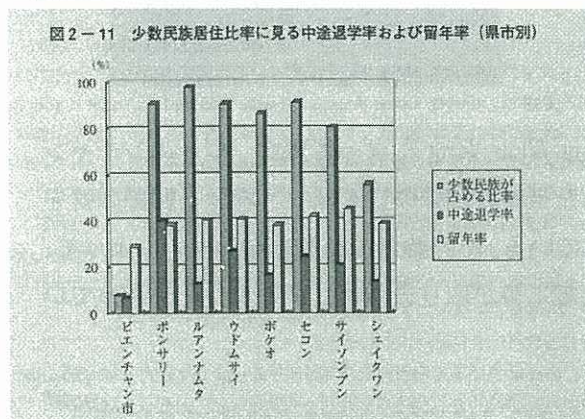
出典：乾美紀(2004)『ラオス少数民族の教育問題』明石書店 p. 73 より引用

#### ●識字率



出典：乾美紀(2004)『ラオス少数民族の教育問題』明石書店 p. 75 より引用

#### ●中途退学率と留年率



出典：乾美紀(2004)『ラオス少数民族の教育問題』明石書店 p. 78 より引用



### ラオスの民族間に教育格差が広がっている理由として・・・

- 1、「教育資源・インフラストラクチャー」
- 2、「教員をめぐる問題」
- 3、「社会・文化的要因」
- 4、「政府が提供するカリキュラム」

#### 4. 教育環境の改善に向けて

- ・教育省が発表「2010－2020 年までの教育戦略構想」

→貧困家庭、少数民族、女子、障害者などハンディキャップのある生徒に教育機会を与えると明記されている。特に、少数民族に配慮されている。（寄宿舎学校を造る。適切な方法でラオス語を教える。）

#### 参考文献

- ・乾美紀(2004)『ラオス少数民族の教育問題』明石書店
- ・地球の歩き方編集室(2009)『地球の歩き方 D23 ラオス 2008～2009 年版』ダイヤモンド・ビックス社

#### ラオストーリー ②

##### 【Wat Sisaket ワットシーサケート】



ワットシーサケットは 1818 年、King Anou Vong によって建立。ヴィエンチャン最古の寺院で、市内で唯一、建立された当時のままの姿を保つ。本堂と回廊の壁を合わせると 6,840 もの仏像が安置されている。その殆どはが度重なる戦いによって、目に嵌め込んでいた宝石類や頭部の金細工等が取り去られているが、一部残っているものもある。

## ラオスへの国際協力

斉藤美貴

### 1. ラオスの開発受け入れ体制

- 開発受け入れには複数の政府機関が関与：計画・協力委員会(CPC)、外務省、財務省が主要官庁

- 計画・協力委員会(CPC)：

開発援助受け入れに関与するラオス政府機関のうち、最も重要なのが計画・協力委員会(Committee for Planning and Cooperation; CPC)。国家社会経済開発計画(National Socio-Economic Development Plan; NSEDP)、公共投資(Public Investment Program; PIP)を策定、外国援助および民間投資の促進・管理、経済・社会統計の整備・分析を担当。

CPC の傘下の部局の中で、外国援助の受入・管理を担当するのが国際協力局(Department of International Cooperation: DIC)。外国援助受け入れに関わる戦略・指針・計画の策定、援助要請の審査・承認、援助プロジェクトの実施促進・モニタリング、ドナー側との総合調整をする。主要業務は、①援助要請の審査・承認手続き②ドナー側との協議取りまとめ。全部で 6 課あり、それぞれ国際金融機関、国連機関、EU・欧米諸国(カナダ・ロシア・キューバを含む)、アジア・太平洋諸国、実施モニタリング、庶務・管理を担当。

### 2. 主要援助機関

- 世界銀行、IMF の PRSP(貧困削減ペーパー)：

ラオス政府のオーナーシップのもと、ドナー、NGO、市民社会、民間セクター等が参画して作成する貧困削減に焦点を当てたラオスの重点開発課題とその対策を包括的に述べた、3 年間の経済・社会開発計画

\*ラオスでは、国家貧困撲滅計画(National Poverty Eradication Programme :NPEP)が PRSP の役割を果たす。

- アジア開発銀行(ADB)による貧困参加型アセスメント(PPA)：

コミュニティの参加と機会を拡大することで貧困削減に貢献。

貧困撲滅の基本原則：①持続的な経済成長、②社会開発、③政策・制度開発による良い統

治(good governance)

事業実施：農村開発と市場とのリンク、人的資源開発、持続的な環境管理、民間セクター開発と地域統合に優先度を与え、最貧困地域である北部地域を中心に東西回廊開発に関連してシェンクアン県とサヴァンナケート県を重点地域としてとらえる

・PPA の調査結果に基づいて事業方針が決められる。開発の現場レベルにおける行政と貧困対象地域のコミュニケーション不足、土地問題などの問題点の把握や、村長など住民の開発事業の決定過程に関わってもらうことが貧困削減の鍵

- UNDP による各種会合や PRSP に関わる執筆作業の協力、技術協力
- JICA による支援
- 二国間援助
- マイクロファイナンス

### 3. 今後の関係が注目される国

#### ➤ タイ

人口の約 70%がタイとの国境近くの都市に集中。ベトナムや中国よりもアクセスしやすい。ラオスの主要民族と、タイ東北部の民族は同じラオ族。

豚・鶏等の中小家畜がタイから流入し、ラオス国内に悪影響を及ぼす。

ビエンチャンでは、ラオス産よりもタイ産の米がラオス米よりも 2~3 割高く売られ、タイ米のほうがいい評価を受けている。

生産分野に資本投下しながら利益を上げ、自国に持ちかえる生産活動

#### ➤ ベトナム

ラオスで生産活動を行うだけでなく、ラオス社会の中に入り込み、ときには村から村長に選出された人もいる。南部の市場では、ベトナムからの鶏肉が売られている

#### ➤ 中国

ラオスの生産分野に資本投下し、ラオス国の市場経済化がラオス農民の生活を潤すのではなく、近隣の投資家、経営者、農民を潤している状況。

まとめ(私見を含めて)

開発＝経済成長だけなのか←文化の面は？

- ・ラオスの開発がメコン地域、東アジア全体の経済発展にとって大きな重要性(JICA)
- ・ラオスの援助依存度を軽減し、自立的な開発、経済成長を実現するための自助努力を強化(JICA)
- ・PRSP：単なる債務救済と引き換えに差し出す文書ではなく、開発・貧困削減を推進するために現実的に意味をもった政策枠組み。貧困国それぞれに国民参加による民主的な政策形成のための制度が生されることの必要性。(IMF、世銀)
- ・ビジネス環境の改善、外国投資の向上(EC)
- ・現在の開発の潮流市場経済社会への参入準備としての開発

本当にラオスのための開発？

- ・SWPsによるドナー側の団結力強化
- ・PRSP作成における世銀・イギリスからの強い内政干渉→民主的？←ラオス主体の開発であるか、何のためのPRSPなのか。

#### 参考文献

- 瀧田修一(2008)「ラオス：貧困削減に向けた基礎教育支援」 廣里恭史・北村友人編著 『途上国における基礎教育支援—国際的なアプローチと実践—(下) 学文社
- 荒木康紀(平成16年)「ラオスの市場経済化の進展と農業開発の方向」 夏秋啓子・板垣啓四郎著『離陸した東南アジア農業』農林統計協会
- ケオラ・スックニラン(2010)「ラオス—タイ越境インフラ整備を経済活動—第1・第2メコン友好橋を中心に—」 石田正美『メコン地域 国境経済をみる』アジア経済研究所
- 松本悟(2005)「水とともに支えられた生活と開発：ラオスのある小さな村の30年」 佐藤寛・青山温子編著『シリーズ国再開発第3巻 生活と開発』日本評論社
- 正木幹生(2003)「貧困の現実と対策」 西澤信善・古川久継・木内行雄編『ラオスの開発と国際協力』めこん
- 古川久継(2003)「財政・金融制度と政策」 西澤信善・古川久継・木内行雄編『ラオスの開発と国際協力』めこん
- 木内行雄・滝田修一(2003)「教育制度と実情」 西澤信善・古川久継・木内行雄編『ラオスの開発と国際協力』めこん
- 渡辺肇(2003)「開発援助受け入れ体制」 西澤信善・古川久継・木内行雄編『ラオスの開発と国際協力』めこん
- 国際協力機構(平成18年)『対ラオス国別援助計画』国際協力機構
- 高橋基樹(2006)「国際開発援助の新潮流：グローバル・ガバナンスの構築に向けて」 西川潤・高橋基樹・山下彰一編著『国際開発とグローバル化』日本評論社
- 外務省ホームページ：[www.mofa.go.jp/mofaj/](http://www.mofa.go.jp/mofaj/)
- 世界銀行ホームページ：<http://www.worldbank.org/>
- アジア開発銀行ホームページ：<http://www.adb.org/>
- UNICEF ラオス事務所ホームページ：[http://www.unicef.org/infobycountry/laopdr\\_55471.html](http://www.unicef.org/infobycountry/laopdr_55471.html)
- UNFPA ラオス事務所ホームページ：<http://lao.unfpa.org/pcpd.htm>
- SIDA ホームページ：<http://www.sida.se/English/>

国際協力機構(JICA)	ドイツ	スウェーデン	フランス	オーストラリア	アメリカ	中国	その他機関	国際NGO
<p>①「人間の安全保障」の観点から貧困削減を促進すべく、ミレニアム開発目標の達成に向けた着実な歩みを支援 ②自立的・持続的成長の原動力となる経済成長を促進すべく、その基礎づくりを支援 ③貧困削減と経済成長を達成する上でラオス側の自助努力の前提となる能力開発を支援</p>	<p>技術協力会社(GTZ)による技術協力と復興金融公庫(KfW)による資金協力①民間セクターを含む経済改革支援②天然資源管理とインフラ整備を含む農村開発③教育(職業教育)・保健衛生分野における人的資源開発</p>	<p>スウェーデン国際開発庁(SIDA)が贈与中心にした援助。従来のインフラ整備、森林管理、統計分野の能力強化、税制改革支援から、①貧困削減と社会格差の是正②民主化と人権の推進③医師の研修を支援④文書化面での援助</p>	<p>フランス開発庁(AFD)が贈与を中心とした援助。①農村開発を重点項目とし、②都市計画・インフラ整備③医師を始めとする医療スタッフの研修を支援する等の保健医療④文化面での援助</p>	<p>オーストラリア大使館(AusAID)を中心とした援助①ブラマリーヘルスケープ②村落開発③教育④インフラ整備⑤政策支援⑥WTO加盟支援</p>	<p>麻薬対策、HIV/AIDS予防及び感染者支援、WFPや国際NGOを通じて貧困層への食糧援助等の人道的援助を重視</p>	<p>ヴィエンチャン市内の国立文化ホール建設(贈与)、ヴィエンチャン県第2セメント工場建設(借款)</p>	<p>ノルウェー、デンマーク、フィンランド、ルクセンブルク、ベルギー、イス、タイ、ベトナム【両国の隣接関係】同士の協力関係が複数構築</p>	<p>ラオスでは国内NGOの活動は基本的に認められておらず、国際NGOについても活動上の制約を受けている。ラオスで活動するNGO団体は約60団体。(2005年8月)活動分野は、農業、農村開発、健康、教育、保健、天然資源管理、環境、干ばつ・洪水被害に伴う緊急人道支援、麻薬対策、不発弾処理、人材開発等。国際NGOは政府府による支援が得意に山岳少数民族、社会的に不利な立場にある女性、障害者等に対し、規模は小さくとも、ラオス人の能力を重視した直接的な活動を実施</p>
<p>①基礎教育の充実、教育環境、アクセス改善、就学障害要因の軽減、教育の質向上 ②保健医療サービスの改善：母子保健サービス改善、保健医療分野の人的資源管理能力向上③農村地域開発及び持続的発展政策の活用：農村基礎施設・食料安全保障の確保、地域住民の生計向上、食料安全保障の確保、農業、森林保全分野の政策実施、制度構築④社会経済インフラ整備及び既存インフラの有効活用⑤民間セクター強化に向けた制度構築及び人材育成、投資、輸出促進のため環境整備⑥行政能力の向上及び制度構築：経済政策実施能力強化、公共財政管理、行政改革、法制度・社会的弱者支援制度の整備</p>	<p>国家行政学院(NOSPA)等における市場経済政策セミナー、中小企業振興、道路整備、水供給改善、麻薬コントロール、国立大学林学部支援、インフォマール教育、職業訓練、ブライマリーヘルスケープ拡充、健康科学研究所支援</p>	<p>道路整備、森林資源管理を代表格に、農村開発、水供給・衛生改善、ルアンパバーン・サバンナケーと両県におけるラオ放改改善、環境管理行政強化、司法制度整備、教育、薬剤管理行政、統計管理</p>	<p>農村開発。ルアンパバーンの町並み保存・都市開発、ヴィエンチャン市における都市計画策定・地下電線敷設・水供給網拡充、医学教育、病院施設の子保健研究所・熱帯医学研究所支援、国立大学農学部支援、電気技術者訓練</p>	<p>HIV/AIDS対策、予防接種拡大、保健向上、農村開発、ヴィエンチャン市における農業開発、女子教育向上、長期留学プログラム、国道の橋建設、ASEAN統合、WTO加盟支援、国営銀行改革、人道支援、不発弾処理</p>	<p>1978年の革命までラオス王国政府を支持、革命後存在感が減少。</p>	<p>中国の支援はDAC統計等に載らず、援助実績の不明な点も多い</p>	<p>中国の支援はDAC統計等に載らず、援助実績の不明な点も多い</p>	<p>中国の支援はDAC統計等に載らず、援助実績の不明な点も多い</p>
<p>ラオスの援助依存度を軽減し、自立的な開発、経済成長を実現するための自助努力を強化することが最大の課題</p>	<p>1995年以降、2国間ドナーの中で日本に次ぐ第2位の援助国</p>	<p>1994年以降2国間ドナーで第3位の援助国。2011年までに支援を終える予定</p>	<p>ヴィエンチャンにはフランス語研修センターがあり、ラオス人行政官や留学生に対する語学訓練を行う。1996年以降2国間ドナー中第4位の援助国</p>	<p>村落開発プロジェクトの大部分はオーストラリアのNGOが行う。公衆衛生改善、HIV/AIDS対策、安全な水の供給の分野で活躍</p>	<p>1978年の革命までラオス王国政府を支持、革命後存在感が減少。</p>	<p>中国の支援はDAC統計等に載らず、援助実績の不明な点も多い</p>	<p>中国の支援はDAC統計等に載らず、援助実績の不明な点も多い</p>	<p>中国の支援はDAC統計等に載らず、援助実績の不明な点も多い</p>

出典：渡辺肇(2003)「開発援助受け入れ体制」西澤信善・古川久継・木内行雄編『ラオスの開発と国際協力』めこん及び、国際協力機構(平成18年)『対ラオス国別援助計画』国際協力機構を参考に筆者作成





## スタディーツアー事前訪問記録

日時：2010年8月31日 16:00～17:30

訪問先：特定非営利活動法人ラオスの子ども

東京都大田区南馬込 6-29-12, ミキハイツ 303

<http://homepage2.nifty.com/aspbtokyo/index.htm>

担当：事務局長 野口朝夫さん

訪問者：井上、斉藤(記録)

### ● ラオスの子ども現在までの活動

メッセージ：自分たちの文化をつくることができる人、自国の文化にプライドが持てるようになってほしい。

活動理念：主体的に考え、主体的に社会に参加できる人の育成。人の育成に重点を置く。(ラオス事務所の所長はラオス人が行う。)

本を巡るラオスの現状：ラオスは口承文化であり、文字や本を読む文化があまりない。現在もラオスには本屋さんがない(パソコン関係、外国人向けの旅行ガイドブック、英語の本はある)。本がうっているとしたら、市場の文房具屋さんで本が売られている。現在本の出版は「ラオスの子ども」を始めとする NGO、個人出版によって行われる。

多数の翻訳本も出版：『窓際のトットちゃん』『五体不満足』『星の王子様』。現在までに約 74 万冊を刊行。

■ 1982 年：「ラオスの子どもに絵本を送る会」創立

■ 1990 年まで：絵本寄贈活動

■ 1990 年代

絵本をラオスで作る活動、担い手育成：ラオスに絵本がないことが判明。

1975～1990 年までに 2 冊しかラオスで出版されていない現状があり、図書作成・紙芝居の出版活動を始める。ラオスの題材で、ラオス人が絵本を作成。特に『絵とき辞書』ラオスで何万部も発行、大人にも読まれる。

担い手育成：絵本作家育成、読み聞かせセミナー(教師対象)をひらく

移動図書箱・図書袋普及活動：1991 年頃から開始。本の配給はできるが、活用されず。原因①本の活用方法が教師にもわからない。②役人がもってきた物(図書箱配給時に役人も NGO スタッフとともに行動)だから弧度のが汚して使ってはいけないという意識があった。現在は約 3000 校の学校に普及(全国の小中高校

約 9600 校のうち)

学校図書館設置：人口増加にともない、ある学校では在校生 1000 人を超す学校も生まれる。図書箱では蔵書数が追いつかない状況→本の寄贈、本棚の設置、図書室運営方法を伝授

子ども文化センター設立(CCC)：子ども参加をモットーとする場。図書室・読み聞かせ、伝統文化の継承、図画工作、外遊びなどを通して、自分の考えを相手に伝えられるようになってほしいという願いがある。CCC 出身の中学生は、長期休暇中にキャラバンをつくり、田舎を点々として紙芝居等を子どもたちに行う。子ども教育開発センター(CEC)も同時に支援、教育の質向上に努める。ラオス教育省公認。

日本語絵本翻訳

➤ 1991 年ラオス事務所開設、1993 年東京事務所開設

■ 2000 年～現在、より広い活動：【本の創作】本をつくる・作り手育成、

【本の配布】本を届ける(教育省には)・本に親しむ活動・教員への働きかけ、特に都市部において本購入運動推進

【子ども文化センター】子どもの居場所・文化継承・多様な自己表現

## ● 少数民族への絵本活動

政府は少数民族が使用している言葉を使つての出版活動を禁止。ラオス語の徹底を進めている。

→「ラオスの子ども」では、ラオス語を使用して少数民族の民話の本を作成。少数民族の文化の良さを少数民族の人々だけでなく、多の人に知ってもらふことをねらいとする。

## ● グローバリゼーションの時代における「ラオスの子ども」の活動

- 1、グローバリゼーションの時代の中で何を残していくのか
- 2、教育を受けられること→人生の決定権を持てる(主体的な社会参加への一歩)
- 3、格差社会の中で特に取り残されている子どもたちに対して活動を行う

## ● ラオスでの活動の困難

■ 政府：多様な価値を認めない ⇔ NGO：多様な価値を認めてほしい

■ 政府の NGO に対する意識

- ・宗教の布教活動は認めない：アメリカの NGO がキリスト教の布教活動を行い追放される(10 年前)
- ・「もらえるものは何でももらう」：おカネと物質的な支援は喜んで受け取る

ラオストーリー ③

【Patousai パトゥーサイ】



ランサン通り Lane Xang Ave. にあるパトゥーサイ Patousai はパリの凱旋門を模して作られた。ラオス語でパトゥーとは「扉」「門」の意味、サイとは「勝利」の意味である。下から見上げた天井にはラオスの典型的なモチーフ、神や3頭の像などのレリーフがある。もともとは戦没者の慰霊碑として1960年から建設が始められ、新空港建設に使用されるはずだったセメントで建てられたものである。朝の8時から夕方5時までの間は上に上ることが出来、ビエンチャン市内を一望できる。(本報告書の表紙の写真は、この上から撮影したもの)

## スタディーツアー事前イベント訪問記録

日時：2010年9月8日 18:30～20:00

イベント名：すべての人に、図書館を —9月8日は「国際識字デー」ラオスからの報告—

主催：社団法人シャンティ国際ボランティア会(SVA)

共催：JICA 地球ひろば、財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

参加者・記録：斉藤

### ● ACCU 柴尾智子さんからのお話

- 国際識字デーの誕生：1965年9月8日～11日、イランで世界中の文部科学大臣会議が開催。
- 会議の初日に識字の重要性について各国の合意を得る。

#### ①functional literacy の提案

functional literacy：単なる文字の読み書き能力を超えて、家庭、コミュニティあるいは仕事場での、ある特定の目的のために、理解をもって読み書きができること単なる文字の読み書き能力を超えて、家庭、コミュニティあるいは仕事場での、ある特定の目的のために、理解をもって読み書きができること

#### ②世界中の軍事費を識字教育へ（イラン国王より）

軍を保有する国に対して、一日分の軍事費を識字教育に寄付しませんか？という活動。実際に行ったのは、イランのみ。

- この20年間で識字率は約20%上昇。考慮すべき点は、識字率として現れている数字は、その国の平均値であり、地域によって識字者の数や状態は異なる
- 識字教育の問題点：非識字者が識字者になっても、文字を日常生活で使用しない限り、識字者はまた非識字者に戻ってしまうということ。識字者になれた人々がその後も文字と関われる環境整備の必要性がある
- フィリピンの母子保健&識字のプロジェクトの視察から  
「小学校はドロップアウトしてしまったが、2回目（識字教室）の学校は楽しい」  
「午前8時から始まる識字教室に通うために午前4時に起きて家事をしてから学校に通っている」  
(勉強が楽しくて)「中学校にも行きたい、高校にも行きたい、大学にも行きたい、商売を始めたい」



● シャンティ木村さんからのお話

- シャンティの活動：アジアの子どもたちのために「絵本」と「図書館」を柱に教育支援を活動を行う

学校教育／図書館活動／教育支援活動→学校建設、教員・父母会研修、移動図書館、公共図書館、図書館員研修、絵本出版

- なぜ図書／絵本が必要なのか。ラオスの現状：①ラオスには絵本や図書館が身近にない。学校にも絵本がない。教師も生徒に寓話を話す習慣がない。②副読本としての本の重要性

シャンティの活動：①「おはなし」を教育に取り入れ、子どもの感性・想像力、コミュニケーション力、識字力を高め、教育の質の改善を行う ②子どもたちの学力・理解力向上を通じて退学者の改善を目指す。

- 図書館活動の目標：教育の質、教員の質、教材の改善

図書スペースの確保→学校・公共・コミュニティ、図書館施設、移動図書、図書箱

本→絵本出版、図書購入、日本からの絵本輸送

子ども→読書推進キャンペーン、読み聞かせ、ゲーム等

図書館員→図書館員養成、トレーナー育成

- 具体的な図書活動：①図書箱プロジェクト(2009年で終了)：図書室のない学校に図書箱を送る。

②常設図書館プロジェクト：各県1カ所図書館の無い件が存在。JICAと共同で、図書館建設・立て替え、図書館員育成

③移動図書館プロジェクト：図書室のない地域、視覚障害者の子どもたち、麻薬更正施設へ。移動図書館はその場に1時間ほど滞在。最初の30分は、子どもたちが各々好きな本を読む。後半30分は、読み聞かせ、ゲームを行う。

④絵本出版プロジェクト：年間3〜4冊出版

ラオスの教育現状：①校舎の不足、老朽化 ②教師の不足、質の問題 ③少数民族の教育問題

- 図書活動の成果：欠席・退学・留年率の減少、成績の向上、道徳心が芽生える、ラオス文化や外国文化に関心

- 子どもの5人に2人は卒業前に小学校を辞めてしまう

● 「読み書きができる」ということ

- 生きるチカラ(死活問題) ■人間らしさの習得 ■自分の存在を認識

- 世界への広がり ■社会参加への道

## 調査の概要

## スタディーツアー日程表

Date	Time	Detail
11/9/2010 (ビエンチャン)	11:00	成田発
	15:30/19:50	バンコク着/バンコク発
	21:30	ビエンチャン着
12/9/2010 (シェンクワン)	13:00-13:40	シェンクワン県へ移動
	14:00-15:00	Child Youth Development Center 訪問
	15:15-16:30	シェンクワン県教育事務所訪問
13/9/2010 (シェンクワン)	7:00 - 8:30	Kham District へ移動
	9:00 - 11:00	Phoumeung Primary School 訪問
	12:00-13:30	Hot Spring 見学
	13:30-15:30	Linmeung Primary School 訪問
14/9/2010 (シェンクワン)	7:30 - 8:30	ラオスの NGO 団体 MAG と UXO 見学
	8:30 - 9:30	Ladngone Primary School へ移動
	10:00-12:00	Ladngone Primary School 訪問
	12:30-14:30	Phonngam Primary School 訪問
	14:45-15:15	ジャール平原観光
	15:30-17:00	Na-o 訪問
15/9/2010 (シェンクワン)	7:30 - 8:30	日本の NGO Japan Mine Action Service (JMAS) 訪問
		シェンクワン県教育事務所にてプレゼンテーション
	14:10-14:50	ビエンチャンへ移動
	17:00-20:00	市内散策
16/9/2010 (ビエンチャン)	8:45 - 10:20	ラオス教育省初等教育局 訪問
	10:30-11:30	ラオス国ユネスコ国内委員会表敬訪問
	15:30-16:45	市内散策
	17:00	ソンバット氏のご自宅にて夕食
17/9/2010 (ビエンチャン)	8:00 - 11:00	在ラオス日本国大使館訪問
	11:15-12:15	ラオス教育省中等教育局訪問
	13:30-16:00	PADETC にてラップアップ
	17:00-19:30	PADETC スタッフと共に夕食
	20:00-21:00	空港にてソンバット氏とラップアップ
	21:45	ビエンチャン発
	22:50/23:50	バンコク着/バンコク発
18/9/2010	8:10	成田着

# ラオス国シェンクワン県地図

- ・ 県全域
- ・ シェンクワン県ペク郡
- ・ シェンクワン県カム郡

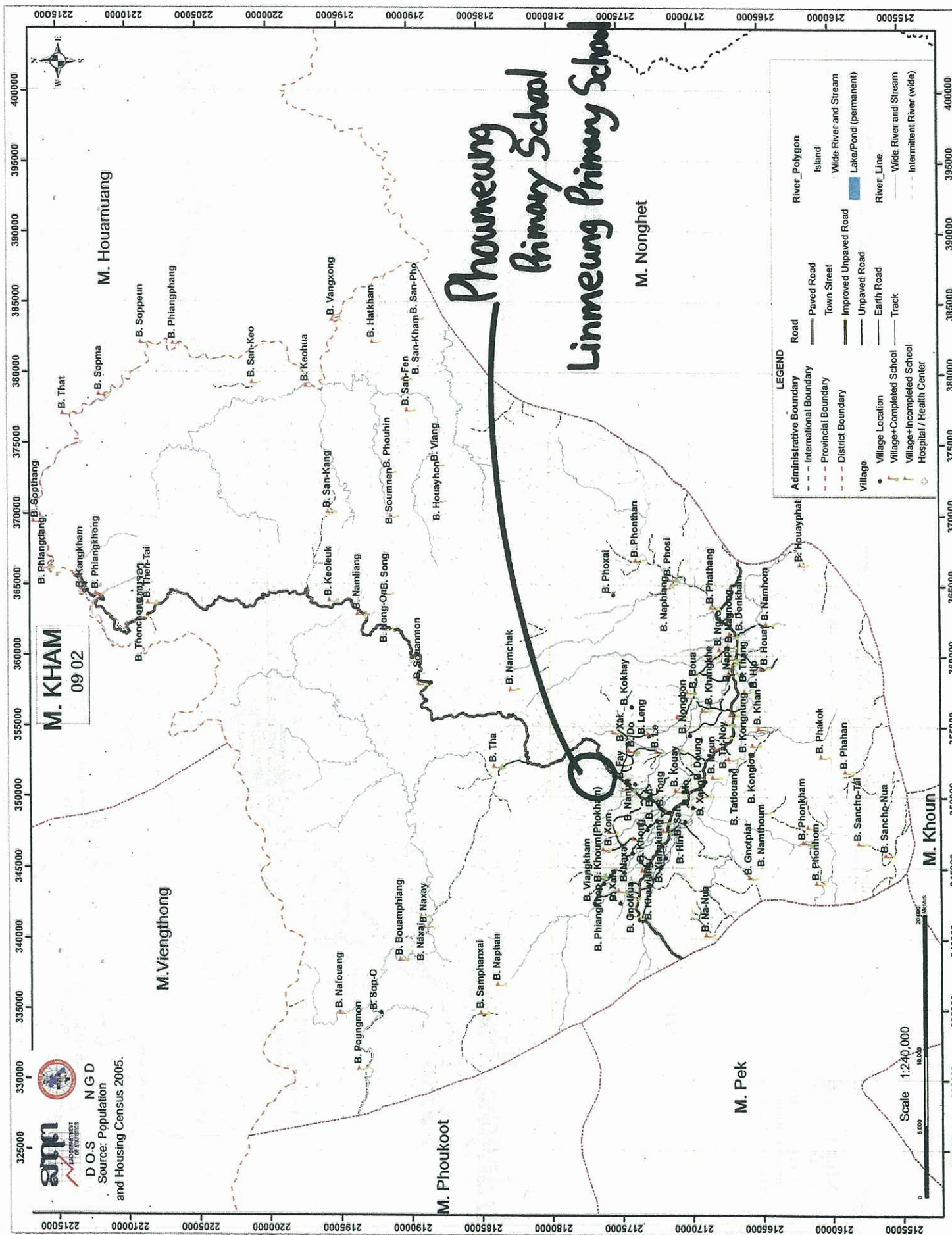












## 訪問校の特徴

学校名	開校年	全校生徒数(女子)	少数民族出身の生徒数	教員数(女性)	ライフスキルの内容	その他
プームアーン小学校 (Phoumeung Primary School)	1998 年	152 (70)	30 (5)	14 (8)	ハンディクラフト (竹かご) 伝統的なフィッシュソー스作り	2009 年に UNICEF と AEON の援助で学校改築
リンムワン小学校 (Linmeung Primary School)	1992 年	125 (不明)	125 (不明) 少数民族の タイ・ダム族	7 (5)	毎週水曜午後に女子は料理 (ちまき・バナナチップ等)、男子はハンディクラフト (竹かごや虫入れ等) 作成	低学年校舎は日本の ODA、高学年の校舎はアジア開発銀行が支援。貧しい家庭出身の子どもは制服を着ていない
ラッドゴン小学校 (Ladngone Primary School)	1975 年	268 (128)	77 (32)	16 (14)	教材を子どもたち自ら創作 男女共にちまき作りを行う。地元の人が子どもたちが作るちまきを購入することもある。	月に一度授業参観がある。学校評議員が各コミュニティーに 1 名おり、月に一度先生方と会合を開き、月間目標をたてる 家計が厳しく制服を購入でき尾ない家庭には、コミュニティーが制服を貸し出す
ポングワン小学校 (Phonngam Primary School)	1995 年	301 (145)	207 (101)	17 (15)	紙箱や、使用済みカードを使用したバッグ・帽子作り	学校評議員が教師にフィードバックをする。少数民族の文化継承に力を入れる



## シェンクワン県教育事務所での発表(要旨)

私たちはシェンクワン県で素敵な笑顔と、人々のつながりの強さに出会いました。子どもたちの笑顔、先生方の笑顔、コミュニティーの人々の笑顔、たくさんの笑顔に出会い、私たちもとても幸せな気持ちになりました。また同時に生徒、先生、コミュニティーのつながりの強さも見ることが出来ました。これらのつながりの強さがあったからこそ、私たちは人々の笑顔に感動したのだと思います。

しかし、同時に私たちには危惧することもあります。ラオスの、シェンクワン県の開発・発展についての危惧です。もちろん私たちの生活は、人間の基本的ニーズ(BHN)の上に成り立つものでなければなりません。安全で保障された衣食住、そして学校に通うこと、これらは不可欠です。私たちが危険と感じているのは、人々がBHNを得たその後の生活の発展です。BNHを得た後に私たちはどのようにして生活水準を高め、また高い生活水準を保てばよいのでしょうか。

私たちは、開発には二つの方向があると考えています。一つ目は、「日本型開発」。二つ目は「もう一つの発展」です。「日本型開発」とは、日本が第二次世界大戦以降に経験した経済、社会成長のことを指します。特に大都市では、高層ビルが立ち並び、どの家庭にもコンピュータがあり、どの人も携帯電話を所有し、また大量の資本が街に飛び交うようになりました。

しかし、爆発的な社会・経済成長と同時に、私たちは何か大切なものを失ってしまったようにも思います。私たちの「幸福度」は徐々に下降しています。日本のサラリーマンは一日平均 10 時間以上働いています。社会の大多数の人は、「幸福＝お金」と考え、お金が幸福をもたらしてくれる、と感じています。しかし、私たちはこの考えに大きな疑問を抱いています。日本人のすべての人がこのように感じているとは言いません。しかし、私たちは何かしらの「生きづらさ」を感じながら生きているようにも思います。

二つ目の開発の「もう一つの発展」のモデルを私たちはシェンクワン県で見つけました。2つの小学校で私たちはバーシーという儀式を受けました。この儀式を通じて私たちの「いのち」が祝福されていることに気づき、とても幸せな気持ちになりました。食の地産地消のサイクルも見ることが出来ました。コミュニティーの人々が育てた野菜や果物、鶏肉の味は格別でした。また、家族やコミュニティーのつながりが強く、人々の笑顔にどれだけ勇気づけられたことか分かりません。最後に、ジャール平原の謎に包まれた歴史的遺産と、ラオス内戦やベトナム戦争の「負の遺産」を見学しました。過去の事実を学び、昔の人々のメッセージを受けとり、現代に生きる人間としての自覚を持ち、そして将来世代につながる生活を模索する責任が私たちにあることを改めて実感しました。シェンクワン県には、「もう一つの発展」のための必要な要素は十分にあります。

では、「もう一つの発展」を特に教育の分野で、ライフ・スキル・ラーニングを活用しながらどのように進めたらよいのでしょうか。一つの方法として私たちは「学びの共同

体」を創ることを考えました。「学びの共同体」とは、学校やノンフォーマル教育の場を地域の文化と教育のセンターとして学校を構想し、子どもたちが共に学びあう共同体、教師が専門家として育ちあう共同体、コミュニティーが異質な文化と交流して学びあう共同体を指します。また、各学校のライフ・スキル・ラーニングの実践を学校どうしで共有し、学びあうことも重要だと思います。

最後に「学びの共同体」の構築は、シェンクワン県の人々の素敵な笑顔や、人々のつながりの強さの維持のひとつの方法と私たちは考えています。

# 感想文

## 皆で考えた〈開発と持続可能性〉の根本問題 問いの中を生きていく学生達

スタディツアー世話人

永田佳之

ほんとうに稀なことかもしれませんが、人生で立ち止まって考えさせられるような言葉と出会うことがあります。2009年3月末、ドイツで開催された「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」の中間年会議で聴いた次の言葉はその一つでした。

ESDを推進する皆さんに言いたい。地球環境を破壊している国の大半は教育先進国だ。教育開発を進めれば進めるほど持続不可能になっていくという事実をどう捉えるのか。

日本や米国をはじめとした教育大国は、いずれも発展の担い手として高学歴の若者を多く世に出し、経済大国としての地位を築きました。しかし、しばしば指摘されるように、この繁栄は、自国のみならず、他国の環境の犠牲の上に成り立ってきたのは否めない事実です。この点を物怖じせずに主張したインド代表の上の発言は各国の代表を首肯させ、その時、国際会議場は大きな拍手で包まれました。

教育を広め、社会を豊かにさせていくような発展は、人間にとってはよかったのかもしれませんが。しかし、地球環境にとってはどうだったのでしょうか……。人間にとって、そして地球にとって望ましい教育の在り方とは何なのでしょう。

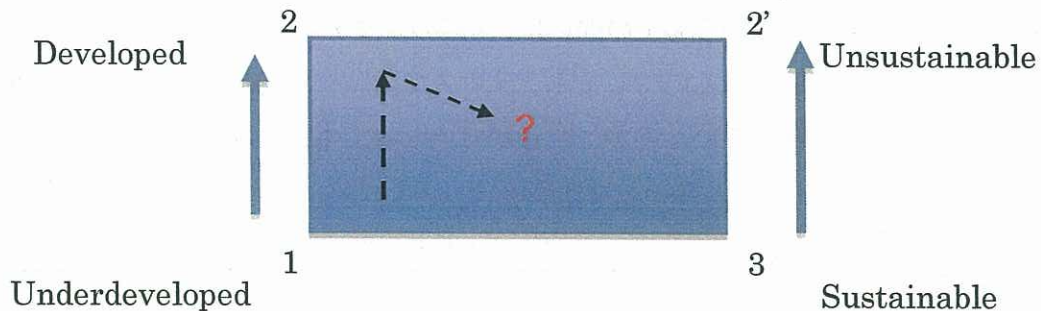
グローバリゼーションの影響下にある現在のラオスは、田舎に行っても外国資本の痕跡と出会うようになりました。モノカルチャーで大規模なトウモロコシ畑など、道すがら目に入ってくる光景を眺めながら、しばしば頭をよぎったのは「発展すればするほど、持続不可能になっていく現実をどうするか」という問いでした。

シェンクワン県での一日の調査を終えたある日の晩、宿のバルコニーでソンポン夫妻と学生たちと日没後のひと時を過ごしていた時のことでした。明確な言葉にならないまま筆者の頭の中を漠然と巡っていた上の問いが、皆との会話の流れの中で重要な「問題」としてはつきりと共有されることになったのです。

ラオスの人々は豊かになりたい。しかし、その一方で、先祖代々大切にしてきた森や川、田んぼや畑も守りたい。では、どうすればよいのか……。ジレンマとも言えるこうした問いを整理する上で、ふと想起したのは、ラオスに発つ前日に聞いたカル



ティケア・サラバイ氏（インドの環境教育センター長）の講演会で目にした次のような図でした。



上図では、通例、国や社会がたどる発展の経路がクリアに示されています。四角の左の縦軸はある国（社会）の発展度を表わします。一方、右の縦軸はその国（社会）の自然環境の持続可能性を示しています。つまり、いわゆる低開発国と称される国は1から2へ経済・社会の発展を遂げようとしします。しかし、発展のプロセスと同時に、かつては持続可能であった社会が持続不可能になっていくものです。高度経済成長を一気に成し遂げた戦後の日本はその典型であると言えます。

しかし、多くの国は2に達してから、環境の重大さに気づき、持続可能な社会を求めて3を意識しはじめます。しかし、ひとたび到達した快適な生活のレベルを下げずに3に向かおうとするので、これがなかなか上手くいきません。そこで2から3への線上の上方で往生際悪くうろうろしているのが多くの先進諸国の実際ではないでしょうか。

実際、ラオスも含めた多くの途上国は1からまずは2へ向かい、そして3へ向かうというシナリオを描いているようです。しかし、すべての国々がこの経路をたどることを待っていると、地球がいくつあっても足りないほどに環境が破壊され尽くされてしまうのは必至です。

では、どうすればよいのか……。私たちは、バルコニーの四角いタイルの上に日本からもってきたキャンディを四隅にのせて、途上国をあらわすキャンディや先進国をあらわすキャンディを動かしながら、持続可能な発展とは何なのかを問い続けました。

クリアな解答をもたないまま、シェンクワン県の教育庁やヴィエンチャンの教育省やNGOでの調査報告会で学生たちはあえて上図を用いて発表しました。中には「私たちラオス人は発展もしたいし、自然も守りたい。じゃあ、どうすればよいのか?!」と真剣なまなざしで問う役人もいました。しかし、正直なところ、力不足の我々は、こうした問いを受けとめることはできても、堂々と答えることができないまま、今回の旅を終えたと言えます。

この旅を通じて、ソンボン氏は「人生は学びであり、学びは人生である。問いの中を生きなさい」というメッセージを節々で我々に伝えていたように思われます。果たして、人間社会の発展に第三の道があるのか、あるとすればそのための教育とはどのような在り方なのか — これからも上の問いは、今回のスタディツアーに参加した学生たち一人ひとりの中で続いていくのでしょうか。ラオスで授かった〈宿題〉を学生たちがこれからどのように取り組んでいくのか、今後がたのしみでもあります。

#### ラオストーリー ④

##### 【伝統儀式：バーシー】



「バーシー」は、ラオス人の生活に根付く宗教儀礼である。新年、出生、結婚、死別等人生の節目や、歓迎、送別などの際に行われる。バーシーの際には必ず小さな祭壇が用意される。写真の中央にあるのがその祭壇で、通常、祭壇にはバナナの葉っぱで編んだ円錐状の芯に白い糸の束を結んだ竹串や花などを刺し、豚・鶏等の丸焼き、お米、果物、お菓子、40度もある蒸留酒ラオラーオが飾られる。祭司は村の長老が務めるそうで、口伝の祝詞を唱えながら、儀式を進める。その内容は、当日の主役の健康、幸せ、安全、繁栄などを祈っているという。祝詞が一段落すると、祭司をはじめとする村の人々が祭壇に供えられている糸を手に取り、願いを口にしながら主役の手首に結びはじめる。この糸は最低3日間は結んだままにしておかないと、ご利益がなくなる上に不幸が訪れるとされている。



## “The Power of Indigenous Knowledge”

斉藤美貴

今回のスタディーツアーを通じて学んだことは、「土着文化のチカラ」です。

スタディーツアーに参加以前は、『学校で「土着文化」について学ぶ』というと、真っ先に「伝統文化継承」が思い浮かびました。私が小学生のとき土着文化について学んだのは、文化継承をするという目的があったからだと思います。昔の人の生活様式や遊びを知り、「おばちゃんの時代はこんな生活や遊びをしていたんだ！今とぜんぜん違うなあ。」と感じたことを覚えています。でも、ただそれだけ。「そうなんだ！」と思っただけにとどまりました。だから私はシェンクワン県に行くまで「土着文化」＝「伝統文化継承」という意識があり、文化継承にどれだけの潜在能力があるか知りもしませんでした。考えることもしなかったかもしれません。

しかし、シェンクワン県の4校の小学校で見てきたものは、これまでの私の意識を大きく覆す実践でした。各学校、地域の特色を活かしながらライフ・スキル・ラーニングを展開し、2校目の視察を終えた時点で『どうやら「土着文化」は、単なる「伝統文化継承」だけではなさそうだ』と思うようになっていました。そして4校目の視察が終わったときには「土着文化」の授業に対する意識が変わりました。「土着文化」は単に「伝統文化継承」だけでなく、他にも多くの要素を含んでいることに気付きました。それらの要素を以下の4点にまとめました。

はじめに、笑顔です。子どもたち、先生、コミュニティーの人々、たくさんの笑顔に出会いました。皆、教えること、学ぶことを楽しんでいました。また、人々の笑顔は、笑っているその人自身だけでなく、他の人々にも勇気や元気を与える力も秘めていました。

二つめに、人々の生き生きとした姿を見ました。特に地域の人々は子どもたちと接し、伝統文化を教えることにとってもやりがいを感じているように見えました。最初に訪問した学校で地域の方(65歳男性)にお話を伺う機会がありました。彼は、ライフ・スキル・ラーニングの時間に子どもたちに地元の食べ物のつくり方や、ラオス版エアロビクスを教えることがとても楽しいと言っていました。また、インタビューをしていくにつれて彼の顔が生き生きとしていくのが分かりました。ライフ・スキル・ラーニングの受益者は子どもたちだけではなく、学校に関わっている大人もまた、ライフ・スキル・ラーニングの受益者だったのです。

三つめに、ライフ・スキル・ラーニングの活動に関わった人々全てがエンパワーされていることです。コミュニティーの人々は、若い世代(子どもたち)に地元の知識を教えることを楽しみ、また元気づけられ、子どもたちも大人との交流を楽しんでいます。

四つめに、ライフ・スキル・ラーニングの学びの場には「つながり」が生まれていました。ライフ・スキル・ラーニングに関わる全ての人々が一致団結し、「つながりの輪」が出

来ていました。また、土着の文化を学ぶことで、子どもたち自身は、自分が大きな「いのち」の「つながり」の中に生きていることを知る機会にもなります。昔の人と、そして未来の人とつながっている自分の大切な「いのち」を体感する契機になります。この体験により、子どもたちの自尊感情は自然と上昇し、その高い値を保つのではないかと思います。

以上の4点を踏まえて、土着文化の力は伝統文化継承するだけでなく、人々の幸せで満ち足りた生活をもたらす一端を担っていることを学びました。「持続可能性」や「サステイナビリティ」という言葉には様々な意味を含んでいる分、私はしばしば『何が持続可能性なのか？』と悩んでしまうことが多々あります。今回の視察を通して、持続可能性ということを考えることももちろん大切ですが、同時に「将来世代に何を残していきたいのか」という視点から物事を考えることも必要ではないか、と思いました。

最後に、このスタディーツアー(事前学習を含む)を通してたくさんの方々に協力、お世話になりました。本当にありがとうございました。この感謝の気持ちを新たな原動力とし、日々学び・行動し続けたいと思います。

---

！ラオスのフォーマル教育では、学校で教えるカリキュラムのうち80%は国が指定したカリキュラムを使用して授業を進めていくことが義務付けられているが、残りの20%は、それぞれの地域や学校の特色を活かした教育をすることが出来る。今回視察した4つの小学校では、その20%の時間を「ライフ・スキル・ラーニング」という時間にし、生徒の保護者や、地域の住民が学校に来て子どもたちにラオスの伝統的なお菓子の作り方や、竹細工のつくり方、バナナチップのつくり方、子どもたち自身が学習教材を作成したりと、活気ある実践を行っていた。

---

## 自然への回帰という視点

下里祐美子

バーシーという、ラオスの宗教儀式をご存知だろうか。ラオス人にとって大切な宗教儀礼である「バーシー」。歓迎や送別など、人生の節目において行われる。私たちも、シェンクワン県の2つの小学校で、このバーシーに招待された。バーシーを行う部屋に通されると、バナナの葉が乗った小さな机の上に、オレンジ色の花や糸、卵、お菓子、ラオスのお酒（アルコール度数がとても高い!）、ご飯などが飾られている。祭司を務めるのは部落の長老で、私たちを祝福していると思われる祝詞を唱えながら、儀式は進んでいく。（一説には、ラオス人でさえも祝詞の内容がわからない部分もあるという。）祝詞が終わると、机の上にあった糸を参列者同士で願いを込めながら腕に巻いていく。この糸は最低3日間付け続けなければならない、3日以内に外すと幸福が得られないばかりか、災難が降りかかるという。主催者側の参列者が一人一本ずつ糸を持ち私たちの腕に巻くため、2校目の儀式が終わった頃には、たくさんの糸が包帯のように見え、手首を怪我したような状態であった。これほど、私たちは多くの願いや祈りをいただいた。

この儀式を通し“自分という自然”に出会う瞬間があった。この言葉はファシリテーション革命（岩波アクティブ新書）などの著者として知られる、中野民夫先生の言葉である。自然は海や山、川など外的なものを指すだけでなく、私たち自身も自然の一部であり自然そのものだ、という意味を持つ。バーシーは、精霊信仰のひとつである。ラオスの人々の間に精霊信仰が深く根付き、見ず知らずの私たちを願い、祈ってくれた姿に心から感動した。どの瞬間に“自分という自然”に出会ったのか？と問われると回答に困ってしまうのだが、自然と共存する生活があまりに自然な彼らの姿自体から、そう感じたのだと思う。彼らのこの姿勢に、「豊かさ」を感じた。

シェンクワン県の地方教育省でこの3日間で学んだことを発表させていただく機会があり、この中で私たちは「持続可能性を重視した経済発展のあり方」を強調した。だが、これに対しラオス側から「経済発展を求めると持続可能性を失う。この矛盾をどうすればいいのか」という問いがかえってきた。ラオスの未来、そして教育を真剣に考えているからこそ出てきたその問いに、心が震えた。同時に、私自身の考える持続可能性はあくまで先進国的な視点でしかないこと、押し付けでしかないことを知り恥ずかしくなった。

押し付けにならない議論、そして真に持続可能な未来社会を構築するために必要なものとはなんだろうか。彼の出した問いに対する自分なりの答えは未だに出せておらず、「立場」や「視点」を大切にしたい学びをこれからもしていかなければいけないと痛切に感じているのだが、世界中で起こっている様々な問題を解決する方法は意外とシンプル



なのかもしれない、今の私は感じている。バーシーで出会った“自分という自然”という感覚が、そのヒントのような気がしているのだ。なぜなら自分自身を理解することは、自然を知り、他者を尊重するための出発点となるものだと思うからである。自分自身への理解を通し、多様性を容認できるこころの育成、他者への尊重、そして知性や感情だけによらない価値判断ができる自分になることができる気がしている。

本だけでは得られない多くの学びを下さったソンバット氏、そしてこの旅のために尽力してくださった永田先生、また関わってくださった多くの方に心から感謝の意を申し上げたい。

### ラオストーリー ⑤

#### 【シェンクワン県の不発弾事情】



ラオスには、今でも多くの不発弾が眠っている。シェンクワン県は、その中でも不発弾の被害が深刻な地域である。不発弾が落とされたのはベトナム戦争時で、200万トンもの不発弾落とされたという。これは直接ラオスを標的にしたという理由から落とされたものではなく、アメリカ軍が自国の所有している空港に着陸する際、事故のリスクを少しでも減らすために爆弾を落としていったんだ、と現地の方が教えてくれた。空中からシェンクワンの見下ろすと、今でもクレーターの後を確認することができ、街中には空の爆弾で作った植木鉢などが置かれていたりする。

(参考 : <http://plaza.rakuten.co.jp/kokoronoyasuragi/diary/?ctgy=3>)

## What I have leant...

井上苗奈

成田空港から、飛行機で約7時間30分、ついにラオス人民民主共和国に到着。私は初めて発展途上国に足を踏み入れました。「日本と全然違う。」これが私の最初の感想でした。私はこれからどういう旅が始まるのか、不安と期待で一杯でした。私たちは、バンコク空港で一人ひとりこの旅に向けて、目標を書いて発表し合いました。私は…「ラオスの良さを感じたい!」と言いました。正直、たった7日間の旅でラオスの良さを感じることができるのだろうか、と思っていましたが、しっかりとラオスの良さを感じて日本に帰ってきてた自分が今ここにいます。

私が感じた1番のラオスの良さは、豊かな自然が広がっていることです。シェンクワン県に行った時、道を歩けば、犬や猫、アヒルや鶏、牛や水牛があちらこちらにいて、動物だけでなく、バナナやココナッツの木なども道端にありました。「ラオス人は、自然と共に過ごしているのだな。」と思いました。また、私たちは、牧場に行きました。本当に広くて、思わず私は走ってみたいくらい先生と広大な牧場を走りました。何とも言えない気持ち良さと、開放された気持ちになり、今でも忘れられないです。最後の夜には、Mr. Sombathの家で、メコン川を眺めました。言葉に表せないくらい本当に綺麗で、時間が止まったような気がして、いつの間にか、心が落ち着いていました。その時、私は、私の生活の中に、ほとんど自然と接する機会がないことに気が付き、それは、私に足りない部分でもあり、日本にも足りない部分でもあるということに気づかされました。日本は、戦後、めざましい発展に成功しました。その結果、自然を破壊することになりました。しかし、まだ日本にも素晴らしい自然があります。残された自然とどう付き合っていくかが問われると思いました。


次に私が感じたラオスの良さは、ラオス人は、誰にでも、受け入れる寛容さがあることです。また、時間を気にせず、物欲は薄く、何があってもボー・ペン・ニャン（どうにかなる）と意に介さない、仏教の教えに根付いた生き方をしているな、と思いました。私たちは、4校の公立小学校に行きました。それぞれの学校に特徴はありますが、共通して言えることは、子どもたちや先生は常に笑顔で、見知らぬ私たちを温かく受け入れてくれたことでした。2つの学校で、私たちは、“バーシー”と呼ばれる新年、出生、歓迎、送別などを願って行われるラオス人には切っても切れない宗教上の大切な習慣・儀式をやって頂きました。私は、ラオスの人達が儀式の最中におまじないのような言葉や両方の手首に木綿糸を巻きつけるなどの行為、またそこに置いてある食べ物の意味が、全く分かりませんでした。しかし、とにかく、彼らは、私たちを歓迎してくれていることだけは、分かりました。私は、すごく嬉しかったです。

このように、今回のスタディツアーで、2つラオスの良さを肌で感じる事ができました。この良さをずっと続けて欲しいと心から思いました。しかし、誰もが豊かさにあ

こがれてしまいます。豊かさをとれば、自然は無くなっていき、時間で行動をするようになり、物欲は濃くなっていつてしまいます。国が発展していくと共に、ラオスの良さや伝統を守っていける方法があるのかどうか。私には、まだ答えが見つかりません。ラオスの旅は終わってしまいましたが、新たな課題が見つかりました。まだ私はスタート地点にいます。時間をかけてこの問いに対する答えを探していきたいと思いました。

また、日本から離れてみて、ラオスの良さだけでなく、日本の良さも感じる事ができました。後進国であるラオス、先進国である日本、どちらも良い面と悪い面があります。しかし、それは、人にも長所、短所があるように、その両面があるということを認め合って生きていかなければならないと私は思います。私が考える日本の良い面は、生活の便利さ、モノの豊かさ、人々の勤勉さ・誠実さ、学校の施設の充実さ、学校教育の質の高さ、医療の充実さなど数え切れない程あげられます。もちろん、日本の悪い面もたくさんあると思いますが、私は、まず日本に生まれ育ったことに感謝したいと思います。私は、将来小学校教諭を目指しています。日本の素晴らしさに気づいていない子どもたちに、私は、子どもたちと一緒に考え、伝えていきたいと思っています。そして、恵まれた国土と文化を大切にしたいと願っています。また、世界にも目を向け、自分たちとは違う生活をしている人たちがいることに気づいてもらい、その国の問題だけでなく、素晴らしさも伝えていきたいと思っています。

最後に、スタディツアーに参加することができ本当に感謝しています。今回ラオスの旅で出会った人やモノ、感じたこと、見たこと、知ったこと、驚いたこと、体験したことを忘れずに日々の生活を送りたいと思います。また、私は、ラオスの良さだけでなく、7日間朝から晩まで一緒に過ごした、永田先生、美貴さん、裕美子さん、理美子の良さを発見することができました。すべての出会いに感謝したいです。ありがとうございました。

ラオス語で... 

コップ・チャイ・ライ・ラ〜イ。

## True value and False value

唐渡理美子

ラオス、そこは今まで聞いても位置さえピンとこないような、私にとっては遠い国でした。途上国と呼ばれる国にいくつか旅行した経験があった私ですが、どれも家族と共にリゾート地に赴き休暇を満喫するもので、(もちろん私にとっては普段離れて暮らす家族と長い時間を共有する貴重でかけがえのない時間だったのですが) 実際の貧しさやリアルな社会問題を想像することは大変困難でした。そんな私にとっての価値観や普段の生活の中におけるプライオリティーは実に物質主義的であったように思います。高校時代から国際協力に携わる仕事に就きたいと漠然と感じていましたが、静岡の山中にあった中高から大都会に身を置いた私にとって東京という街はとても魅力的であり、新しいモノや人との出会いは想像以上に刺激的でした。そんな社会のなかで私は夢と実際の自分の価値観や生活とのギャップにジレンマを抱えていたように思います。

しかし、シエンクワンのホテルのバルコニーでラップアップを行った三日目の夜、ソンバット氏のお話の中の True value<sup>1</sup> と False value という言葉に私は今まで感じた事のないほど大きな衝撃を受けました。私たちの暮らす世界には有り余るほどのモノや人、情報が氾濫しています。それは私にとっては既にあまりに当然なことであり、切り離すことは不可能のように感じていました。更に誤解を恐れずに言えば、切り離してしまったら自分が自分でなくなってしまう様な恐怖さえ感じていました。しかし、ソンバット氏は、心を鍛えれば何が本当に価値あるもので何が偽りの価値なのかに気づき自分自身をコントロールすることができる、とおっしゃいました。教育の最終的なゴールは子供たちが真の価値と偽りの価値を判別できるようになることだ、と。この言葉を聞いたとき、私は今までの自分の価値観やプライオリティーはいったい何だったのか分からなくなり、まさに、何かが音を立てて崩れていくような感覚に襲われました。私が価値をおいて優先してきたものは本当に True value だったのだろうかと自身に問いかけたとき、返事は必ずしも YES ではなかったからです。

本当に価値のあるものはなんなのか、幸せとはなんなのか…途上国が発展しながらも今ある価値あるものを失わずにいる方法は何なのか、私はまだ答えることはできません。しかし、ラオスで感じた人と人との繋がりや、温かくて大きな笑顔は間違いなくかけがえのない True value であると感じます。一方で現代社会に溢れるモノや情報は全て False value か、と問われれば、私はそうと言い切ることはできません。例えばある日、高価なモノを身につけたとしても、それを身につけることによって今日も頑張ろう、背筋を伸ばして歩いてみようと思えるきっかけとなるのならその人にとってそれは真の価値になり得ると思うからです。ただ、氾濫するモノや情報だけに流され、踊らされることは寂しいことだと感じます。常に自身を振り返り、今の価値観や優先順位は本当に True value であると言えるのか、なぜそう思うのか、見つめなおす時間を持って生き

ていきたいです。ソンバット氏が空港で最後におっしゃった言葉にLife is Learning. という言葉があります。この言葉の通り、真の価値を見つめなおし、学んだ時が新たな人生のスタートであると思うと、自分自身にも、そしてこれからの社会にも希望がもてる気がしました。最後になりましたが、このスタディーツアーの事前学習から帰国まで親身になってご指導くださった永田先生をはじめ、協力してくださった全ての皆さまに感謝いたします。本当にありがとうございました。

## ラオストーリー ⑥

### 【メコン河とラオスの人々の生活】

唐渡 理美子

首都ビエンチャンでメコン河の堤防に立ったとき、天気こそ悪かったが、想像を超えた広大さに心を打たれた。水の色は赤茶色で、堤防も赤土が多くねっとりしており、河自体が美しいとはとても言い難かったが、それでも緩やかにどこまでも流れていきそうなその河は私の眼にはとても魅力的に映った。

メコン河は東南アジア最大の河川で、全長は約 45000 キロ、総面積は約 80 万平方キロにも及ぶ。水源地域は中国のチベット山塊の氷河地帯にあり、ミャンマー、ラオス、カンボジア、タイ、ベトナムの六カ国を流れている。下流地域の流域面積の各国の比率はラオスが 35%と最も広く、更に各国の国土面積に占めているメコン河の流域面積支配率を見てみるとなんと 90%のも及ぶ。このことから、ラオスにおいてメコン河が大きな存在であろうことが推測できる。実際にラオスでは水資源が国を立てる大きな要因の一つとなっており、養殖業も行われている。それ以外にもメコン河へそそぐ小さな支流を漁場にして魚介類が捕られることは非常に一般的であり、人々の生活を支えている。私たちがシエンクワン県で回った学校のなかでも、魚を捕るための道具を竹で作るライフスキルを実践している学校もあったように、人々の生活と密接していることが感じとれる。

しかし、近年の開発により、様々な問題も生まれているのが現状だ。首都ビエンチャンは道路や上水道などのインフラが整備されるために湿地や水田が埋め立てられ、多くの森林が伐採されてきた。当然水辺の環境は大きく変化せざるをえなかったことが分かる。ラオスは元来水産物の自給率の高い国で食生活においても魚は最も身近でかつ重要なたんぱく質を補うものとなっていた。実際にまだ開発の手が伸びていないシエンクワンの学校では魚を使った伝統的なソースがライフスキルの一つとして広く教えられていたこと、滞在中魚を使った料理が多くでてきたことから分かる。しかし、様々な開発や、近年ではタイやカンボジアといった国々からの輸入でその形態は大きく変化している。ラオスが豊かになることはもちろん大切なことであるし、人々が不便に感じていることや困っていることが改善されてほしいと切に願うが、一方で、堤防で初めてみたメコン河や、ソンボン氏のご自宅からメコンに沈んでいく綺麗な夕日を思い出すと、ラオスの人々がメコン河や他の雄大な自然と共生しながら発展していったほしいと願わずにいられない。



# 写真集

11/9/2010

●Let's go to Laos! 出発前、成田空港にて…



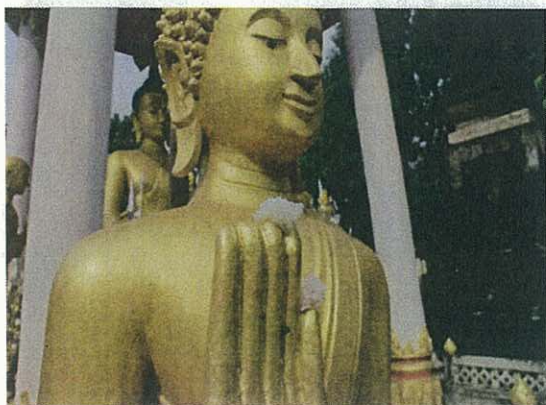
●バンコク空港でラオスに行く目的・目標を発表



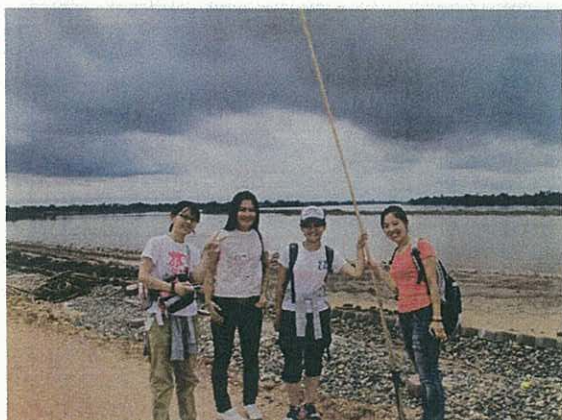


12/9/2010

●Wat Sisaket (ワットシーサケート) ビエンチャン市内のお寺



●メコン川



●プロペラ機でシェンクワン県へ移動



●Child Youth Development Center



ラオスの伝統舞踊



子ども達と一緒に



13/9/2010

●Phoumeung Primary School



校長先生のお話を聞く



竹遊びをしている永田先生



昼食をご馳走になる



子どもたちと遊ぶ祐美子

●Hot Spring



教室



源泉



● Linmeung Primary School



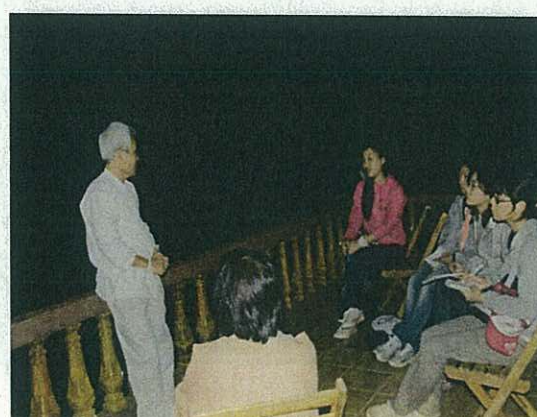
地域の人が来て、生活するうえで必要な Life Skill を教えている  
 (男の子は、魚やカエルをとるための籠作り) (女の子は、バナナチップス作り)



ラオスの伝統的な儀式「バーシー」

● 夕食

● ソンボン氏と夜の語り合い





14/9/2010

●朝食



市内のお店でお粥を食べる



爆弾(安全なもの)の展示



爆弾を花瓶として使用



不発弾の被害にあった NGO スタッフのお話

●Ladngone Primary School



女の子が自分の作品を説明中



教師のみなさんと



●Phonngam Primary School



学校で学んでいる子どもたち

●Plain of Jar (ジャール平原)



●牧場



地元の森を自分たちでケアしている子どもたち



15/9/2010

●Phouchanh Resort (シェンクワン県で滞在したホテル)



朝食

●Japan Mine Action Service (JMAS)



地雷除去をするラオス人の養成・研修をする日本の NGO (中塩孝さんと)

●シェンクワン県教育事務所



所長らにフィールド調査で学んだことをプレゼンテーションする



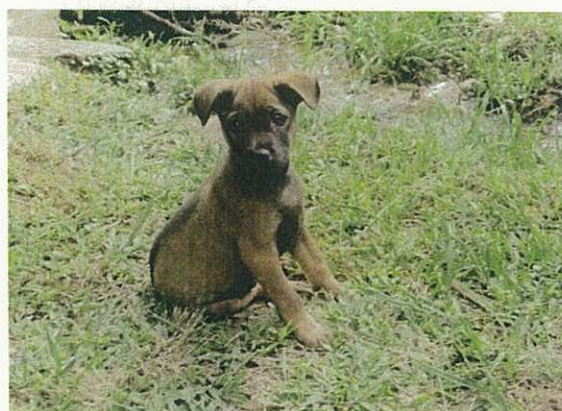
●ビデオ撮影



PADETC のメディアチームによる取材



みんなで取材を受けました！

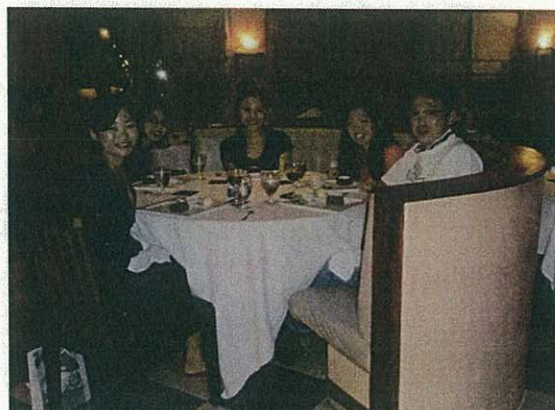


のら犬

●ビエンチャンに到着



●夕食



フォンダンショコラの美味しい  
フレンチレストラン



16/9/2010

● ラオス教育省初等教育局表敬訪問



教育行政局長とソンポン氏



教育行政局長と一緒に

● National Commission for UNESCO



ユネスコ国内委員会事務局にて

● PADETC



PADETC オフィス入口



きれいな壁画でいっぱいの  
PADETC オフィス



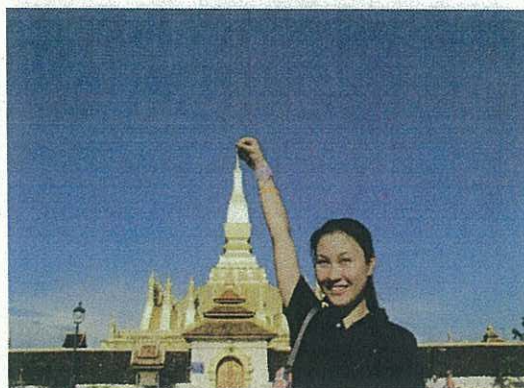
PADETC が作成した教材



●Patousai(パトウーサイ)



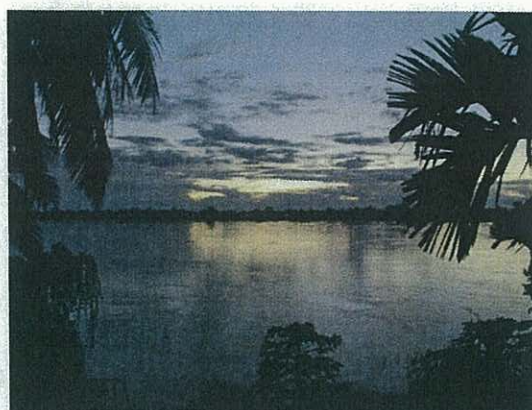
●That Luang(タートルアン)



●仏教の寺



●メコン川



ソンボン氏宅からのメコン川風景

●ソンボン氏のご自宅



メコン川を眺める



夕食をご馳走になる



17/9/2010

●ラオス教育省中等教育局

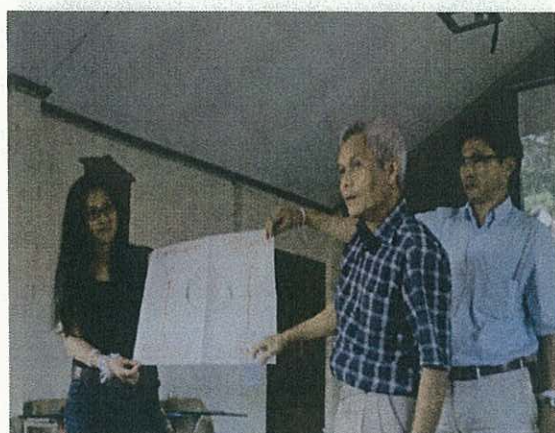


中等教育局長と、  
JICA 職員として働く荒川彩さんと

●PADETC



まとめの会(wrap up meeting)



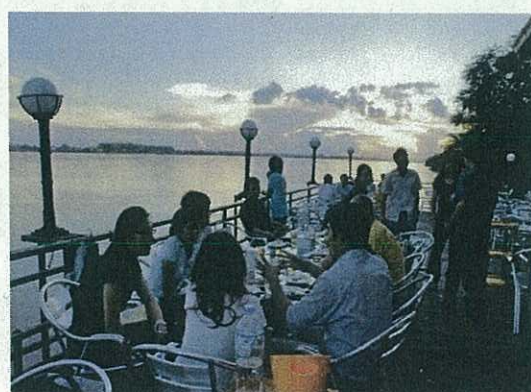
PADETC でラオスでの学びを発表



理美子による日本舞踊



Mr.Sombath の秘書.Keak さんと



帰国直前に PADETC スタッフと共に夕食

# ソンボン氏講演資料

2010 年 3 月聖心女子大学でソンボン氏を特別講師  
として招き公開講座を開催した際の資料



# **Exploring the Heart of Education Through Spirituality and Sustainability:**

The way we live and the way we educate dictate the future

by  
Sombath Somphone  
Director

Participatory Development Training Centre (Padetc)

## **Introduction**

My presentation aims to explore education at its heart and how it relates to the way we educate ourselves and others, the way we live, and how it can pave the way towards our own and society's wellbeing now and in the future.

The inter-relationship and inter-dependency between education and sustainable development is inseparable. From a developmental perspective, education and development are mutually reinforcing and complementary; with education promoting and supporting sustainable, socially just livelihoods for people, and with societies evolving and changing while ensuring social, economic and political and environmental balance and stability.

We human beings are at the top of the animal world, not because of our superior strength, but because of our intellectual, emotional, and analytical capacities. Human babies are born to this world well-endowed with innate emotions and intelligence, which can be further fostered through social and environmental stimulation to ensure that they grow to their full potential. This fostering or stimulating process is what we call "Education" with a big "E", and is different from education with a small "e", which more accurately should be referred to as "schooling".

The "Education" I talk about is a holistic and comprehensive process that takes place throughout one's life – from birth, or actually even before birth, to death. This concept is not new and is in all the literature and studies on education development. However, despite spending billions and billions of dollars in setting up schools, hiring educators and training teachers, why are we still not better educated? Yes, we have produced brilliant politicians, bankers, lawyers, and scientists, but in my opinion we are still not adequately "educated" in the true sense of the word.

My lifelong experience and involvement in working in the area of education and development tells me that most societies have not been giving its' citizens "real" education. We are mostly interested in getting our schools and universities churn out well-trained graduates whose certificates will secure them good jobs, which in turn will bring wealth, material goods, social recognition and prestige – the mark of "success" in

our present-day competitive world. In reality, what our education system is practicing is only “schooling” and “certification” and not “real education”. It has only provided people with a narrow set of skills to “compete” and to “consume”, and gave them false values by equating happiness with the pursuit of wealth and material goods. We rarely think beyond what all these mean? Will all that material wealth and prestige bring us greater peace and real happiness? In fact, many successful and wealthy people are discontented and stressed, and many so-called wealthy and developed societies are plagued by increasing rates of violence, suicide, physical and mental illnesses, environmental pollution, and social unrest.

The sad fact is that as parents and educators, we all know that our education system is deficient or broken, but we have not done much to change it. Trying to effect change in the education system is often seen as too big, too complex, and too difficult to achieve. But, I believe that change is possible, even though it may not be perfect; but change must start with us and start now.

### **The heart of education is the education of the heart.**

Let’s explore how we can effect change in education beyond “schooling” towards real education that is holistic, integrated, and will also support development that is politically, socially, economically and culturally sustainable and balanced. To achieve this we need to get to the heart of education. And for me, the heart of education is first and foremost *education of the heart*. What do I mean by that? What I mean is that it is not enough for education to inculcate and transmit practical and technical skills, crucial and necessary though these are. For education to be transformative, it must foster values for spiritual, ethical, and emotional well-being, the true basis of wisdom, contentment and happiness.

#### *Spirituality as the heart of education*

Before I discuss spirituality as the heart of education, let me make one point clear. I am not a religious person and I do not claim to know much about the teachings of different religions. I come from a Buddhist culture and call myself a Buddhist, but I am not a Buddhist scholar. When I talk about spirituality and ethics, my reference point is in the context of Buddhist teachings and values, not as a religion, but as a philosophy of life.

The Buddha tells us that life is learning and learning is about knowing the nature of truth. Learning the nature of truth or Dhamma needs to be based on respect for life and its relationship with all living and non-living things. And to truly learn, one needs to start with the self – learning mindfulness and self-awareness. This is why Buddhism places such importance on meditation (mindfulness) practice to tap into the healing power of spirituality for cultivation of mental strength, inner peace, moderation (or self-control), and loving kindness and compassion towards all living things (people, animals, nature). Meditation and reflective practices help us calm our mind and stay focused on the “present” and what truly matters now, instead of dwelling in the past,

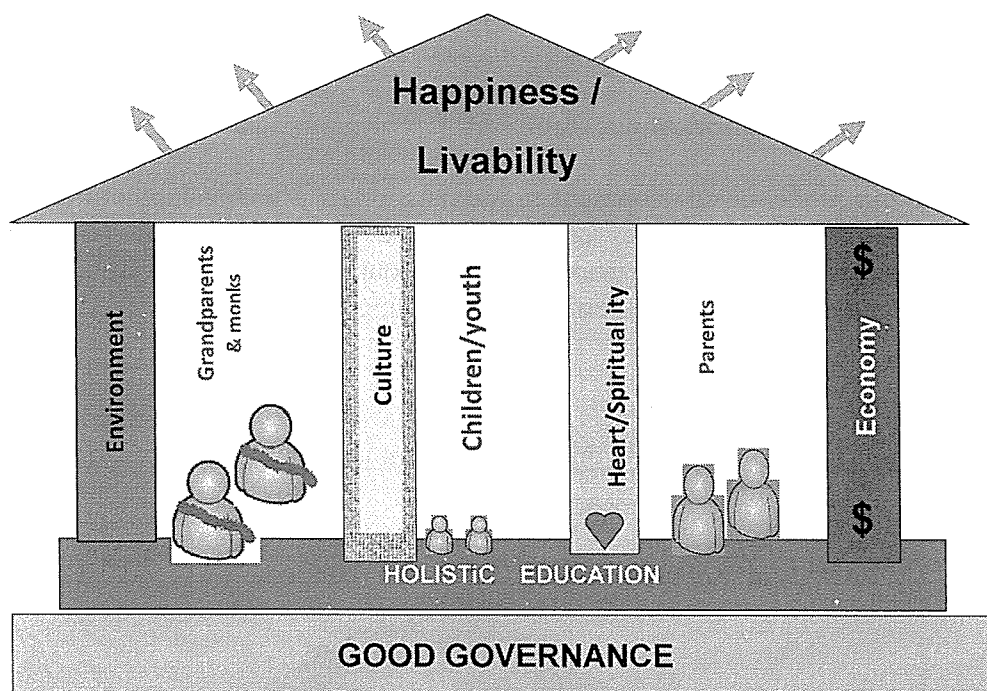
(regretting what we should have done, or resenting what others have done to us) or living in the future (thinking and worrying all the time about how to become successful or accumulating more and more). Such practice is what Buddhist teachings mean by “letting go” and freeing ourselves from “suffering” such as greed, attachment, etc. as basis for achieving true wisdom and happiness.

Now let’s consider whether our schools and universities should help inculcate in our children and young people such basic spiritual values and practice of mindfulness, moderation, loving compassion and respect for self and others? For me, these spiritual and ethical values should be at the heart of education as they are the fundamental life skills or moral compass needed to guide children and young people to become better people, who would then become better citizens, better teachers, and better leaders to shape and guide our societies to live in peace, harmony, and cultural and ecological integrity, and social justice. This I what I call “Education of the Heart” to complement what most education systems have been mostly doing: Education of the Head (learning to use our intellect); and Education of the Hands (learning to do things). For me, education should therefore be a balance of Education of the Head, the Hands and the Heart. It’s only when education can help our children and young people develop their heads, their hands and their hearts simultaneously and effectively, can we call it real and holistic education. And it is only through supporting and advancing real and holistic education can we have development which is sustainable and socially just, and provide people with real contentment and happiness.

### **Proposed model for sustainable education and development**

I will now detail how we can move towards a model of sustainable education and development which emphasizes balanced development of the head, hands, and heart. A model of holistic education and sustainable development needs to balance economic development, environmental harmony, promotion of cultural integrity, and spiritual well-being. Spiritual well-being is what I have indicated above as development of the “HEART”. Unfortunately, the dominant development paradigm today tends to under-emphasize the “HEART”, i.e. the spiritual or psychosocial and emotional wellbeing of people, and over-emphasize the material aspects of life.

Figure 1: Sustainable Education for Development



In my model, holistic education is conceptualized as the foundation for development. The four pillars representing the different dimensions of development are anchored and are part of the education process. In this model, children and young people are at the centre, taking part in the development process and are actively educating themselves and their peers. Parents, grandparents, and spiritual leaders are not excluded, as in the case of most modern education processes, but must be engaged in the education process of their children and grandchildren. Parents are the key breadwinners, but must also be provide emotional support and love for their children. Grandparents and spiritual leaders are symbols of wisdom. They are the holders/preservers of traditional knowledge and skills, and also practical knowledge and experience on sustainable use of natural resources. They are also the main sources for transmission of spiritual, cultural values and knowledge for environmental protection to children and young people. Together, they (parents, grandparents, spiritual leaders) contribute to supporting holistic education. At the base of the model is “good governance”, which holds up the entire model which forms the stable social and political structure which endows all under its roof with security, well-being and genuine happiness.

Thus, deciding development priorities is critical in implementing the sustainable development model. One simple rule is that development priorities should maximize strengthening of all four pillars of development, even if not in equal measure, then at least avoid seriously damaging any of the pillars, and ensure that the benefits

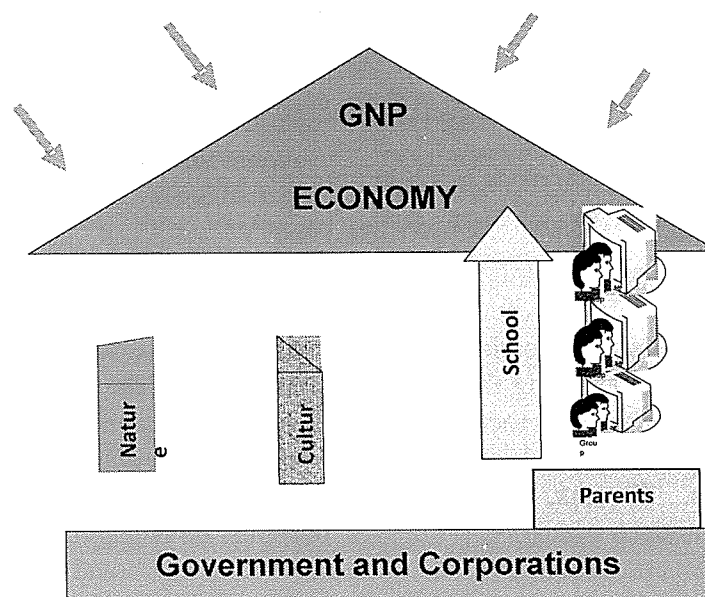


compensate for any of the losses. One should avoid a development model that supports a single pillar to the detriment of the other pillars because that would undermine the balance and sustainability of the entire society.

### Current predominant model of development

Let's look at our model of development as it exists today. The development model that is widely practiced today stresses competition and economic growth (GDP) as its ultimate goal. This growth comes from over-taxing our environmental capital, misusing our human capital, and cultural heritage. Everything becomes monetized, including "Schooling".

Figure 2: **Boom:** Unbalance growth and development is unstable and under stress

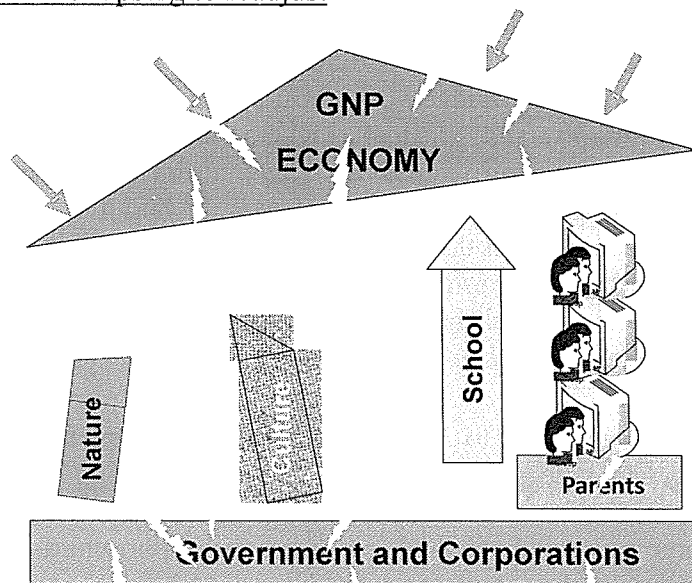


In education, the television has taken over the time parents and grandparents normally spend with the kids. We have handed over the intergenerational and societal transfer of knowledge, history, culture, and wisdom to the media. But, the media is supported by business corporations whose interest is in promoting their bottom-line – hence the media often encourages mindless consumption and promotes greed and violence as entertainment. The media and the entertainment industry have now become the predominant channels for shaping societal values for the young. No wonder, there is so much communication breakdown between the younger and the older generation. We also cannot blame the parents. Parents now have little time for their children. Parents too have been victims of the development model that overly stresses material well-being and career advancement. Hence parents have to work very hard to support the kids

through school as well as to satisfy their kids and their own material needs.

Without safeguards for balance, the skewed development processes will put stress on the system, leading to imbalance and instability, which may not be apparent in the short-term but certainly will lead to systems failure in the long-run. Imbalances are often witnessed in the form of cycles of boom and bust - a way for the system to re-adjust, as we have witnessed in the recent global financial meltdown, food and industrial riots, and even changes in political leadership in some countries.

Figure 3: **Bust:** System collapsing to readjust



### Getting to the Heart of Education

This is where getting to the heart of education and transforming its processes and content can help shift the development paradigm towards creating a better and more people-friendly future for our children and a more sustainable world for all living and non-living things. To do this, we must stop pretending that “schooling” is education and stop relying only on schools and teachers to be responsible for the education of our children and young people. As indicated in my model, we need to unleash the potential of children and youth, and tap into the wealth of knowledge and experience of parents, grandparents, and wisdom of spiritual and community leaders to contribute to education of their young. Teachers and education officials too need to boldly use these available resources around them, instead of keeping them outside the school walls. In doing so, education becomes more than schooling, and learning will become more participatory, more relevant, more complete, and most importantly, learning will be FUN.

Transforming the process of learning and involving available resources to support participatory learning must also go hand-in-hand with transforming the content of what we teach in schools. The school curriculum as designed in most education systems today, generally does not respond very effectively to needs of children and young people. It only provides them with a narrow range of technical skills (reading, writing, math, etc.) and little real life experience to face the challenges outside the school walls or meet the needs of families and communities. No wonder so many parents in places where education is of poor quality, do not want to send their kids to school. Schooling gives certificates as false rewards, just like the mass media gives people a false sense of needs which drives us into indebtedness and unsustainable materialistic life style.

There is no reason as to why we also cannot broaden the curriculum and make it more relevant and practical even at a very young age starting from pre-school and primary school by including practical life skills, and survival skills relevant to their social and environmental contexts. I suggest that the curriculum include learning of indigenous knowledge and spiritual knowledge which reside mostly with our grandparents, crafts people in the community, and spiritual teachers like monks and nuns. It is through consciously rooting our young to their culture, traditions, and wisdom of our society through transfer of indigenous knowledge and spiritual and moral values, can we expect our young to know and respect their past, understand the present, and value and protect the future. This kind of learning will greatly complement current education and narrow the gap between school, family, community and society. This kind of learning is what the Buddha means by *Learning is Life*.

So to summarize, I go back to my earlier model and depict how such participatory holistic learning can take place. In this model of learning (Figure 4), the base of holistic education is active children and community participation, working closely with all available community and spiritual resources, to support child-friendly, spiritual, and relevant life-skills-based content for JOYFUL LEARNING. Such a holistic learning process will, as depicted in Figure 5, empower children and young people to access, select and process information and knowledge around them from all available sources, gain understanding, develop skills, and form positive attitudes and behavior, and take responsibility for themselves, their families and communities.

In Laos, my organization PADETC has step by step taken action to apply these principles proposed in this model of joyful learning with cooperation of schools, communities and temples with some degree of success which I will briefly share with you.



Figure 4: A Model of Participatory Holistic Learning

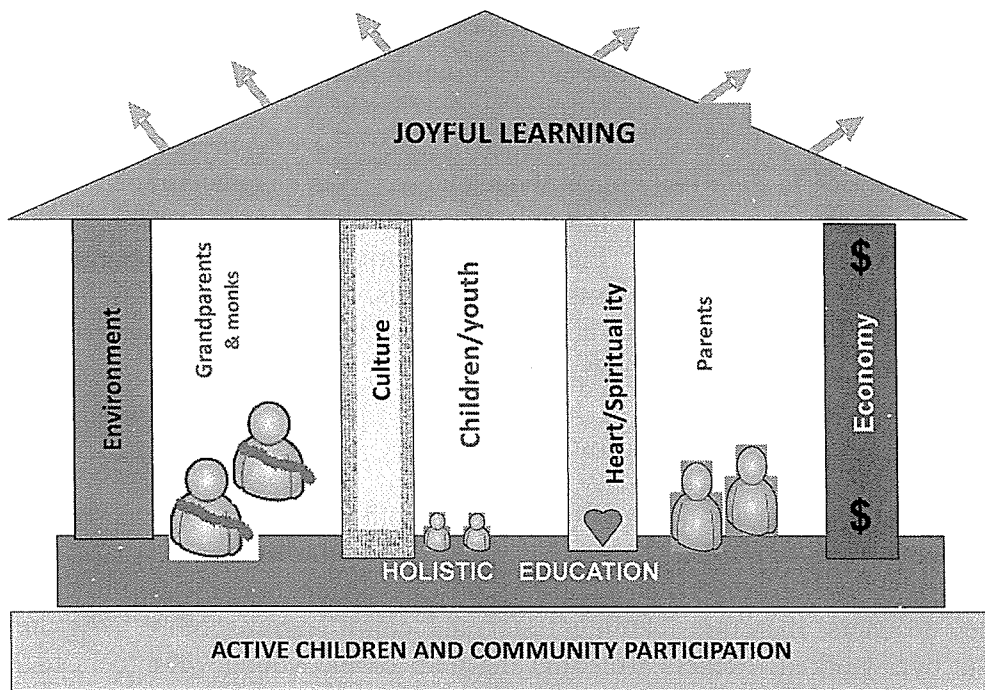
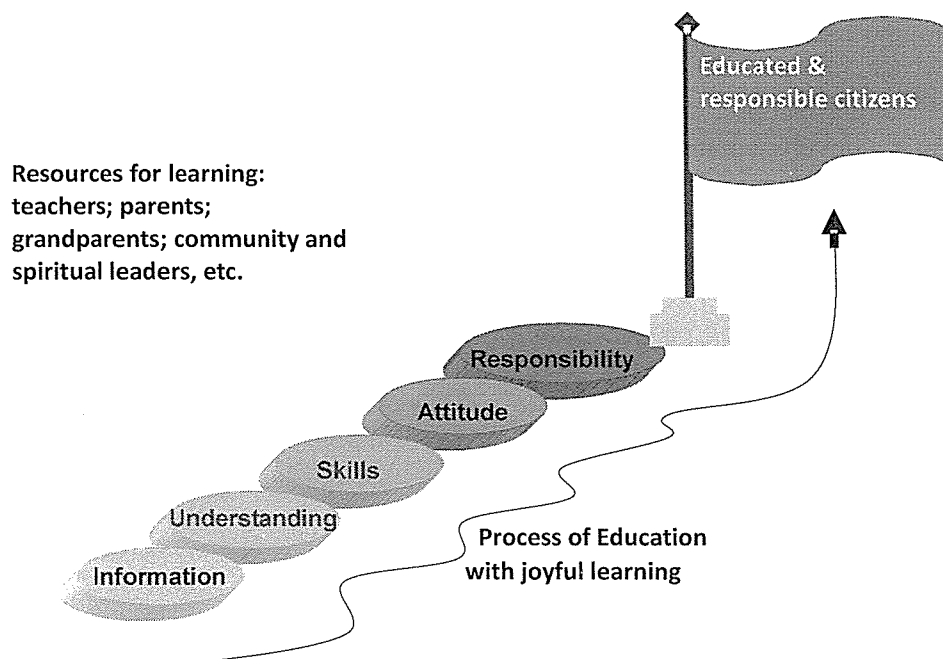


Figure 5: Process of education with joyful learning



## **Some concrete experience from Laos**

### *Peer-to-peer learning*

I have successfully promoted peer-to-peer learning in many schools by getting children and young people to be involved in helping each other learn. For example, instead of having teachers lead in story-telling to teach language, I encouraged teachers to let children read stories to their classmates themselves. This has encouraged children to read and increased their confidence through getting them to read to others, and express themselves through story-telling. From telling stories by reading storybooks, they move to writing their own stories to tell their friends. This way reading and writing becomes more fun and meaningful and at the same time build critical listening and verbal skills from a very young age on.

### *Training youth volunteers to assist in schools*

I also supported the organization and training of youth volunteers to help teachers lead extra-curricular activities, such as aerobic dancing, drama and sports. Children look upon the young volunteers as their elder brothers and sisters and open up to them more than their teachers, therefore learning faster and enjoy learning more. At the same time, the over-worked teachers welcome the help of the young volunteers to relieve them of some of their responsibility for extra-curricular activities. This becomes a win-win situation for children and teachers. Currently, there are active networks of youth volunteers formed in all 17 provinces of the country. Seeing the great potential of young people to stimulate education and development, a number of development agencies also started supporting various types of youth development groups to address development issues like HIV/AIDS; prevention of substance abuse; and trafficking.

For the young people, critical skills of leadership, teambuilding and sharing and empathy are developed and can be transferred into later life.

### *Children's media program*

Also, some of the young people, seeing the power of the media, decided that to use the media to reach out to their peers. With support from my organization and others, young people have negotiated with local radio and TV networks to provide them broadcasting time to run their own youth radio and TV programs. These programs have a larger following among the young than many of the state-produced programs, thereby giving the young some control over the airwaves.

### *Involving community leaders or crafts people to teach indigenous knowledge*

Starting initially with a few schools, I have also encouraged skilled crafts people of the community to help teachers teach indigenous knowledge, like weaving, traditional foods, traditional dance, and so on. Through learning traditional knowledge from their elders, children get to know more of their culture, customs, traditional crafts, and traditional medicines and food. This way, the elderly in the community feel valuable and more linked to their children and grandchildren, thereby closing the generation gap. Through such processes of learning, school children and teachers from different areas have proudly revived producing products unique of their area, such as basketry, textile weaving; traditional jams, etc. for sale at school fairs and at the local markets. This has helped weaned children off “junk” food and “plastic goods”, in favor of natural and organic products and helped to preserve some traditional skills. As a result, the teaching of indigenous knowledge has been officially endorsed by the Ministry of Education.

### *Involving monks to teach spiritual values*

Another major breakthrough we have initiated is the involvement of Buddhist monks to teach Buddhist ethics in schools. This project called “Dhamma Sanchorn” (Mobile Dhamma) education focuses on inculcating in school children spiritual and social values of respect, honesty, justice, environmental protection, and healthy living using a variety of child-centered approaches, such as telling of Buddha stories, songs/chants, and temple fairs. Through these methods, children are taught about respect of parents, respect of self; self-management; care of nature, etc. Children also learn how to meditate both in school and also at summer camps. Recently, the Dhamma Sanchorn project has included teaching teachers reflection and meditation to help them to learn better control, especially in anger management and tolerance to become better teachers and models for their children and members of the community.

Apart from teaching in schools, the Dhamma Sanchorn network of monks, also teach in the drug rehabilitation and handicapped children’s centers to provide them with spiritual and emotional support to give them courage to face up to challenges and difficult circumstances.

The Dhamma Sanchorn education project in focusing on the education of the Heart and preparing children for responsible adulthood is highly welcomed by schools, teachers and parents and is expanding rapidly. In a few short years, it is already having a very positive impact on the behaviour of children, teachers, and families, such as a reduction in petty theft, school yard, bullying, cheating, and child abuse.



### *Integrative learning*

As far as possible, we have also encouraged learning which integrates subject learning to practical life skills and real life situation. For example, learning of science, mathematics, and nutrition is integrated with organic gardening and raising earthworms using kitchen waste. Through this, kids learn about recycling, plant biology, the environment, and the discipline of taking care of another life form. These skills are easily transferred to improve the household economy as children by children and parents using these skills to improve their vegetable gardens and rice fields.

Through these various ways, education has gone beyond relying only on textbooks and teachers. Education now takes place anywhere, anytime, and are no longer seen as segregated and separated school subjects. Learning now takes place inside and outside the schools without school fences separating learning in school from learning in the home, the community and temple. Similarly, there are also no roofs and ceilings to block children's imagination beyond what they can see and hear. Slowly, through such processes, an ecology of learning for sustainable and value-based living is taking shape.

### **Conclusion**

After more than 10 years of working with teachers, community and spiritual leaders, I am convinced that education needs to be holistic and integrative which stresses stimulation of the intellect (Head), working with the "Hands", and most important of all inculcating spiritual values of the "Heart". That is the most practical way to improve the way we learn and impact the way we live, and build a better future for the well-being and happiness of our children and society.

# Exploring the Heart of Education through Spirituality and Sustainability

Sombath Somphone  
Participatory  
Development Training  
Centre  
(PADETC)

Tokyo , March 2010

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Development – Context

- Socialism (as practiced)- single centralized party
- Capitalism- multiparty centralized competition by corporations
- Globalization- centralized competition by corporation with both single and multiple political parties: Consumerism

Globally people are reduced to be customers and workers

It is development of materials and technology with no human soul

We have been hijacked of our wellbeing

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Buddhist Teachings vs. Modern Teachings

### Wisdom

- To rid of all sufferings
- To be in harmony with the natural ecology
- NO self
- To detach
- To refrain and conquer own emotions
- For equality
- Emphasize learning

### Consumerism

- To increase income
- To conquer nature
- MYSELF
- To consume /to own
- To be rich and conquer others
- For competition -- inequality
- Emphasize teaching

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Wisdom vs. Materialism

### TRADITIONAL WISDOM

- Diseases
- Suffering
- Old age
- Death
- To be reflected on and understood

It is EXPERIENTIAL learning  
Similar to EDUCATION

### NEW AGE MATERIALISM

- Strength and power
- Wealth
- Youth and beauty
- Killing and pain

Brought on by TV screen as entertainment for profit

It is FORCE-FEEDING and rote learning  
Similar to SCHOOLING

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Bringing About Change

Change towards holistic education and a more sustainable world should not be left in the hands of the state or to corporations alone.

Nor should we rely too much on schools and to technical and digital solutions.

Young people can be catalysts of change in their schools and communities.

But young people should be also *guided* by local knowledge and spiritual values.

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Balancing WISDOM with New Knowledge

- Young people can drive this change
- But, older people and spiritual leaders can facilitate and guide it with their traditional knowledge and wisdom from the past

Task: Understand the *present*, learn from the *past*, and create a realistic and sustainable *future*

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



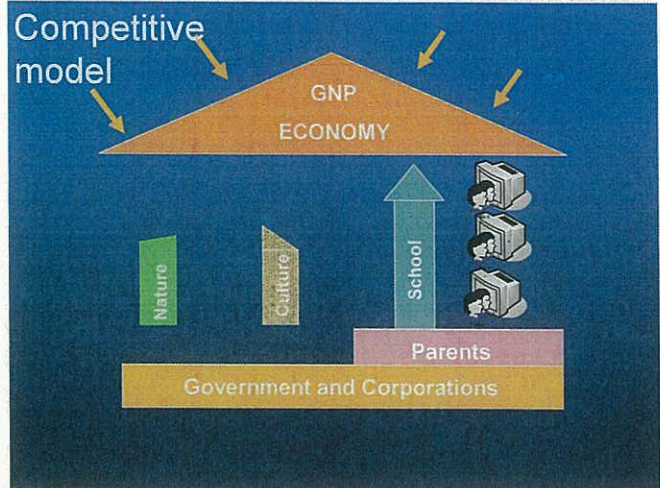
## Understand and Aware of the Present

- Development model – market driven competition
  - Education – rote learning/non-questioning
  - Media – promote consumerism
  - The SELF – indulging own needs/greed

### Learn from others and the Past

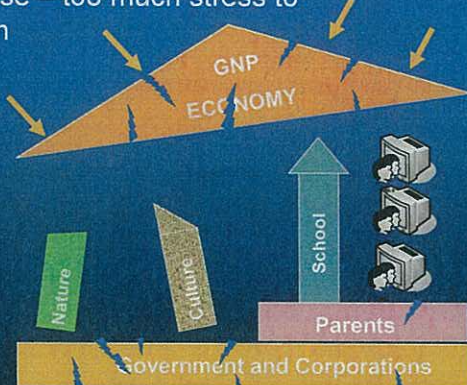
- What have we lost?
- What have we gained?
- What lessons have we learned?
- Stay connected with the past

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

Collapse – too much stress to system



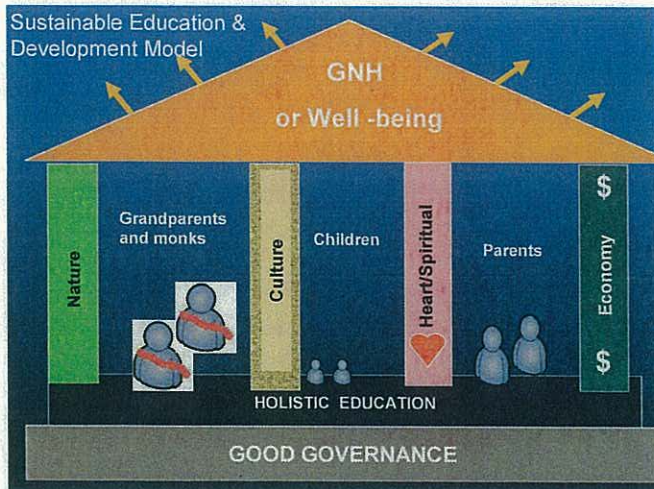
PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Create the Future

- Vision and Action
- Be the change you wish to see
- Tap into positive traditional practices and wisdom
- Link local action to global change

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

Sustainable Education & Development Model



PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Head, Heart and Hands: Quality HRD

- **Schooling:** training of Head in compartmentalized subjects, mostly through providing information
- **Education:** training of Head, Heart and Hands in balance, through discovery and experiential learning & spiritual education.

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



## PADETC in Laos – Youth as Agents of Change

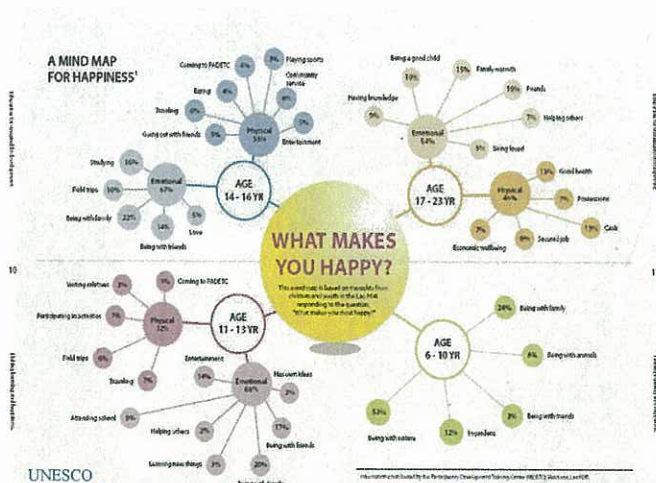
- Train Youth Leaders of various age groups – Primary School; Secondary School; University
- Engage youth in community services in various areas – environment; education; health; agriculture; forestry, etc.
- Through community services – young people learn real life skills and experiences
- Become connected to traditional culture, values, and livelihoods
- Learn to lead, learn to facilitate, and learn to question, and become aware
- Partner with monk volunteers educating the “heart” to children, teachers, and parents.

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Participatory Learning to create an ecology of learning for wisdom and sustainable living

- Peer-to-peer learning and teaching to deliver more joyful learning and holistic education;
- Linking school learning with real life learning – community mapping; garbage recycling; organic farming for integrated learning
- Learning of indigenous knowledge from community leaders and crafts people
- Learning spiritual values from spiritual leaders.
- Linking wellbeing/happiness with learning – happiness mind-mapping

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Linking Happiness to Learning

### Happiness of a child

### Learning activities

- Nature
- Friends
- Family members
- Outdoor activities
- Learning with friends
- Involving parents & grandparents

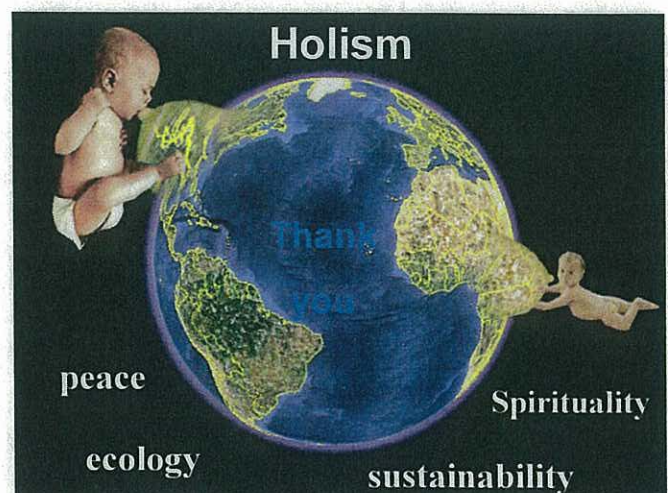
Note: By linking the child's happiness to their learning they will attend school better, pay more attention, work harder, and most importantly enjoy school - **JOYFUL LEARNING**

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

## Formula for Well-being and Sustainability

- **Holistic Education** = Joyful learning with balance of Head, Hands, Heart
- **Happy Families** = Happy children, Happy parents
- **Happy community** = Healthy environment and Happy elderly
- **Happy Society** = Liveability: sustainable livelihoods; social justice; peace and harmony

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



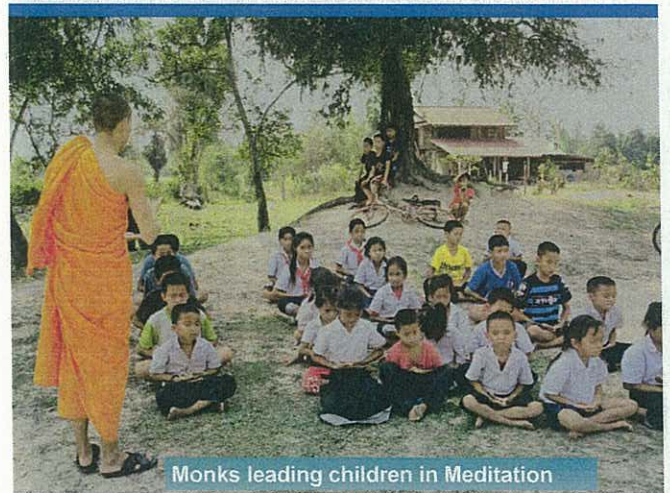
PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)





Monks leading children to care for the environment and to be self-sufficient

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



Monks leading children in Meditation

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



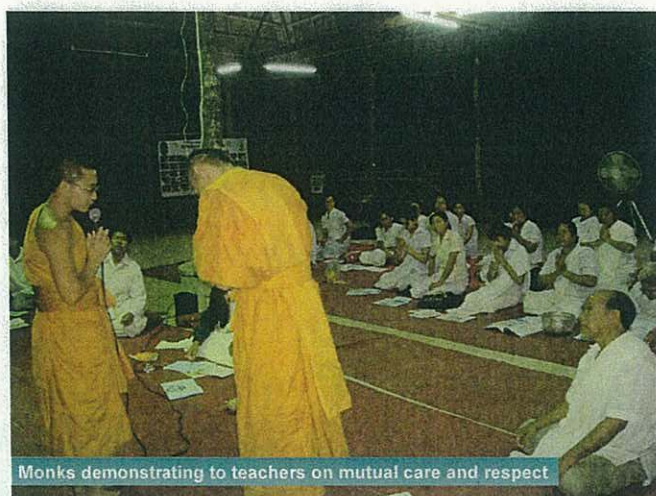
Learning concentration

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



Teachers practicing walking meditation

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



Monks demonstrating to teachers on mutual care and respect

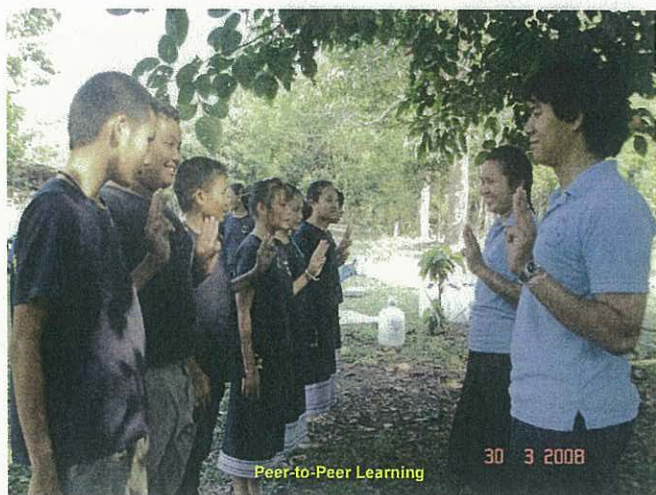
PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



Monks training youth leaders on self-control

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)





PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



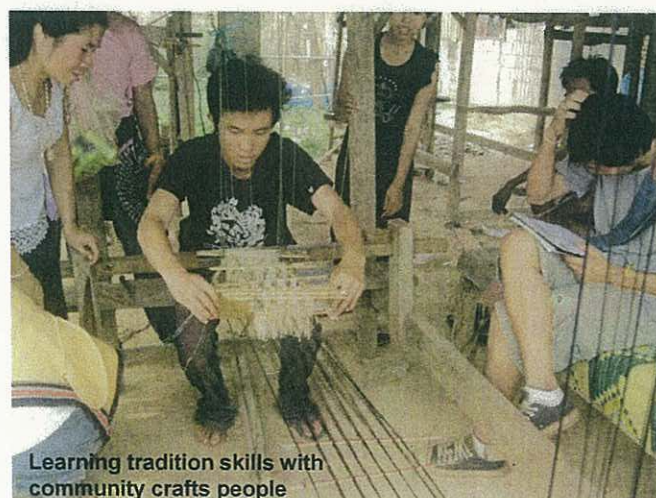
PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)



Thank you  
for your kind attention

PDF created with pdfFactory Pro trial version [www.pdffactory.com](http://www.pdffactory.com)

ESD Study Visit Programme  
Field Study on Education and Development in Lao PDR  
-2010 Report-



11 -18 September 2010  
Vientiane and Xiangkhouang Province, Lao PDR

***Programme Organiser***  
*Yoshiyuki NAGATA*  
*University of the Sacred Heart, Tokyo*

# **Presentation at Educational Authority in Xiangkhouang**



## **Presentation at Educational Authority in Xiangkhouang -Summary-**

What we had learnt for the last four days in Xiangkhouang province are, “smiles and relationships”. We had met many students’ smiles, teachers’ smiles and people in communities’ pure smiles of the people in communities and we were moved so much. Then, we saw strong and good relationships among students, teachers and communities. Also we think the relationships make people happy and give them amazing smiles.

However, here are our concerns concerning development. It is obvious that every human kind must live with the Basic Human Needs (BHN) which are drinking safe water, access to public health, living in safe household, wearing clean clothes and accessing safe and comfortable school. Then, once people gain the BHN, how can we continue developing our lives? How can we improve our lives for the better? Our group think there are two different developing pathways. One is “Japanese-style development” and the other is “another (alternative) development”.

The “Japanese-style development” is the development that we, the Japanese, had experienced after the WW II. Especially in urban areas everywhere, we have lots of high buildings, everyone has computers and mobile phones. Huge amount of money flows everywhere.

But, at the same time, we have lost something important in the process of development. Our happiness is slightly decreasing, relationships among people are disappearing and we tend to feel isolated. Most of the people in companies work more than 10 hours a day. The majority in Japan may believe they can be mainly happy by money. But we have a big question for it. We are struggling in our society. We truly hope Laotian society won’t follow “Japanese-style development” as we had experienced and will choose another development way.

In Lao, there is “another development”, which contains preserving local ceremony, producing and consuming foods in the same area and keeping good relationships with family and community. Moreover, preserving natural environments and historical memories are also important. We have found these components for the “another development” in Xiangkhouang province.

Then, how can we promote the “another development” from the point of education especially by using life-skill learning? Our conclusion for this question is creating “Learning Community”. “Learning community” aims at the school

assumes as a place for community's culture center as well as educational center. In another words, students can learn together, teachers can learn together as an expert also, people in the community can learn together with exchanging their different cultures in the "Learning Community". Moreover, it is important to share each school activities with other schools and learn from each other and improve their life-skill learning.

We hope creating "Learning Community" will become one of the means for keeping Xiengkhouan's amazing smiles and relationships.

# Reflections



## **“The Power of Indigenous Knowledge”**

Miki Saito

What I had learnt through the study tour is, the power of indigenous knowledge. Before coming in Xiangkhouang province, I thought about indigenous knowledge is just a cultural transmission. From my personal experience, when I was elementary school student, I had an opportunity get to know about our grandparents' life style. I still remember, at that time, through the learning, I thought “Wow! My grandparent used to live like this! ”. That's all. I did not think any further. From my childhood experience, this is why I think indigenous knowledge is a cultural transmission.

However, when I saw Life-Skill Learning activities in Xiangkhouang province, I realized that indigenous knowledge is not just contain power for cultural transmission but also contains other elements. Through this field work, I saw 4 good dimensions of Life-Skill Learning.

First, I saw many happy faces. Students, teachers and people in the community looked happy. They were all having fun during learning and teaching. I was impressed because their smiles contain power which make other people empowered.

Secondly, I saw lots of livability. Livability sprang from their soul. When we visited the first school, Phoumeung Primary School, we had interviewed a man (65 years old) who teach indigenous knowledge to students. The more we interview him, the more his face had been changed to very energetic and livability. This was the time I felt strong livability. I will never forget his face. I found out all the people who participates this Like-Skill learning, especially adults, they get livability and this atmosphere makes people happy faces.

Thirdly, people who involved this Life-Skill learning, they feel livability and at the same time, they were empowered. Especially local people were empowered by teaching the local knowledge to the younger generations.

Finally, the place was filled with connectedness. Through learning, all people who involved in the learning were connected with each other. Also, students can feel that they are living in part of the life circle. Moreover, getting to know the local knowledge, students will recognize the connection with ancient people and also they will be able to find a new connection with future generations.

In conclusion, what I found was, the power of indigenous knowledge brings the

power of happy and contentment life. Since the meaning of the word, sustainability is vague and it is hard for me to understand what it is. So, I would like not to think too much about that word, but at the same time I would like to think about what we preserve for our future generations.

## What I had learnt from Laotian's life.

Yumiko Shimosato

Do you know the "Baci"? "Baci" is the traditional Lao ceremony which is a very important for Laotian. Laotian people celebrate each other in "Baci" style in turning points of the lives, for example to welcome someone. We are invited to this ceremony in two elementary schools in Xiengkhuang province. When we passed through the room where Baci was done, we saw orange flowers, strings, eggs, cakes, *sake* of Laos (degree of alcoholicity was very high), and meal, etc. were decorated with banana leaves. Director of this ceremony were the elders of the village reciting the congratulatory address while the priest blesses us. (It is said that some part of the content of the congratulatory address which is not understood even by the Laotian.) When the congratulatory address ends, Laotian participants took the string on the table and they began to tie to it onto our arms. While they tie it, Laotian said to us "Have a nice trip. Good luck!!" etc. We got a lot of wishes and prayers from this ceremony.

There was a moment that I felt "I'm a part of nature" during this ceremony. I have learned this word from a famous teacher Mr. Tamio Nakano's. He says that Nature means not only the external environment such as the sea, mountains, and rivers but also that we are nature itself. Baci is an animism-related ceremony. The animism takes root deeply in Laotian and I was impressed by the Laotian who dealt with foreigners like us sincerely. From the way how they live with nature, I felt "richness".

On the fifth days, there was a chance to present what we had learned in Laos at provincial Department of Education and we emphasized the important of "way of economic development that valued sustainability". However, one of the Laotian official asked us, "When we pursue Laos' economic development, it is extremely difficult to value sustainability. How should we cope with this contradiction?" This question was a sure sign of his serious thinking about the future of Laos and education in the country, I thought. His question moved me deeply. I thought that my opinion about sustainability was only to do with advanced country's point of view, and I noticed that my suggestion about "sustainability" suggestion was too intrusive for them.

In a Baci, I experienced a sense which is "I'm a part of nature". This feeling may become a very important key for constructing truly sustainable future, I



suppose, because I think that understanding oneself as "I'm a part of nature" is a starting point to respect others. I think that to know myself can be the first step to allow diversity to understand others and their feelings.

I don't answer to the Laotian's question yet, so I will keep on learning about "What is sustainability onto others" and when I think about instead of pressing my own ideal of sustainability, I'd like to respect other people's "view point", first.

I want to say sincere gratitude to Mr. Sombath and Professor Nagata who gave us a lot of learning opportunities which could not be obtained only through reading books.

## **What I have learnt...**

Nana Inoue

This was the first time I've visited a developing country. So, I was full of hopes and fears. We announced to each other our targets for this study program at the Bangkok Airport on the way to Lao PDR. I said that I wanted to know the good qualities of Laos. To be honest, I didn't think I would know what Laos' virtues were in only eight days. But, I can say now that I came back to Japan firmly instilled with the knowledge of good qualities in Lao.

The best thing I felt about Laos was that there was a lot of nature. For example, when we walked on the road in Xiangkhouang, we saw dogs, cats, ducks, chickens, cows and buffaloes everywhere. Also, I saw that people use banana skin for table clothes and many fruit trees were planted by the roadside. So, I thought Laotian people live very close with nature. On the evening of the last day of our stay, we went to Mr. Sombath's house and gazed at the Mekong River for a long time. It was gorgeous and overwhelming. I felt as if time had stopped and without noticing I felt calm and peaceful. Just then, I noticed that I have very little opportunities to come in touch with nature in my everyday life. Coming in contact with nature in our daily lives is not just what I need, but what all of Japanese people need. After World War two, Japan made rapid progress. As a result, we destroyed nature. But, wonderful nature still remains in Japan. I thought that we should think carefully of how we deal with the nature we still have.

The next best thing I felt is, Laotian people are generous to all people. We went to public primary schools. The teachers and children were always smiling. They welcomed us warmly. They performed a ceremony for us. It was called "ba-shi". I didn't understand what they said or what their gestures meant during the ceremony. But, anyway, I understood that they welcomed us. I was really happy.

Thus, in this study program, I learnt firsthand the good qualities of Laos. I sincerely thought I wanted to continue feeling the virtues of Laos for a long time. But, everyone yearns for material comfort. If you choose to pursue materialism, you would be pressed for time. Also, the connection between nature and people, the interaction between people and people would be lost. Laos still has a rich natural environment. I haven't found the answer to my question, how to protect the good qualities of Laos and its tradition while Laos develops. Although my trip to Laos has

ended, I am with the new query which I have found during my stay there. I think I want to find the answer to this question with no rush.

Lastly, I felt not only the good qualities of Laos but also the good qualities of Japan. I kept on thinking "Which is happier for human beings, living in a developing country or living in a developed country?" But, I couldn't find an answer to this question and I realized that there were both merits and demerits in both developing and developed countries. As with human beings, we both have merits and demerits, I think we should accept both our good qualities and shortcomings in order to live in harmony. Japan's merits includes the high standard of living, the conveniences, materialistic richness, high technology scientifically, the people's diligence, honesty, abundant school facilities, the high standard of education, the high quality in medical care and many more. Of course, there are a lot of demerits about Japan. But, I'm grateful to the fact that I was born and raised in this blessed country.

I want to be an elementary school teacher after I graduate. And, I want to teach my students the good qualities of Japan and I hope they will value this country's abundant treasure and rich cultures, and that they will lead happy lives.

Finally, I'm very happy to have been able to participate in this study program. My special thanks go to Professor Nagata who organized this study program. I want to remember what I have felt, saw, learned and experienced on my trip to Laos, forever, as I long as I live. I'm grateful to all the people I have met until now. Thank you very much.



## True Value and False Value

Rimiko Towatari

Laos is the most impressive countries that I have ever visited. Many experiences in there were really new for me and I learned many things through them. Needless to say, this study tour was my first visiting to Laos and before I visited, I felt Laos was a very far country from me but now my image of Laos is completely changed. I was really surprised at many things in Laos and it made my thoughts and life changed.

The most impressive thing in this study tour was the word from Mr. Sombath. On the third day, we had a wrap up in the hotel's balcony. Mr. Sombath said that the goal of education is to distinguish the true value and false value. He said if we have strong heart (mind), we can control our behavior and thoughts by ourselves. It was really shocking words for me. At that time, I really question about my sense of value. In Japan, I live in the material world and now, I think I was also materialist. I loved many things which surround me. However, in Laos, I found much more important things such as smiles, relationships and grand nature. Then I found that people in Laos don't have what we have, but they do have the important thing what we lost.

During the study tour, I always thought about what true value is and what happiness is. We can't see it in the shape so it was very difficult to find it out. Still now, I can't find the answer. However, one thing I could found out during the trip was that, smiles and relationships between people in Laos were really the true value. We can't build these kinds of things in one day. It takes long time to make, and once people lose it, it is very difficult to get it back again. Many developed countries know that. Thus, I want people in Laos realize how important and valuable they are.

After coming back to Japan, I try to think about how developing countries can develop without losing these important things such as deep relationships between people. It is very difficult to find the answer. What I can do is that keep on thinking about the way. At the airport in the last day, Mr. Sombath told us "Life is Learning." Like this words, I will try to keep on learning many things from my daily life. I will try to keep on thinking and searching what the true value for my life.

Last but not least, I'm much obliged for Mr. Sombath's and all members' in PADETC kindness. I have learnt so many important things and spend precious time. I never forget the valuable experiences in Laos and I want to visit again in someday.

「本当の豊かさとは何か」  
～ラオスにおける貧困と教育に関するフィールド調査～  
ESD スタディーツアー報告書

発行日 2010 年 12 月 10 日  
発 行 聖心女子大学文学部教育学科 永田佳之研究室  
〒150-8983 東京都渋谷区広尾 4-3-1  
Tel&Fax. 03-3407-5914  
E-mail : yoshy@pobox.com  
印刷所 チョダクレス株式会社 03-3256-1361 (代表)